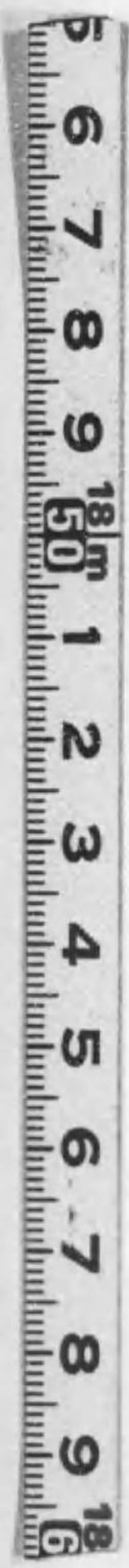


特116

697

竹
朝
山

物
世
流



始



持116

697

竹生島

朝長

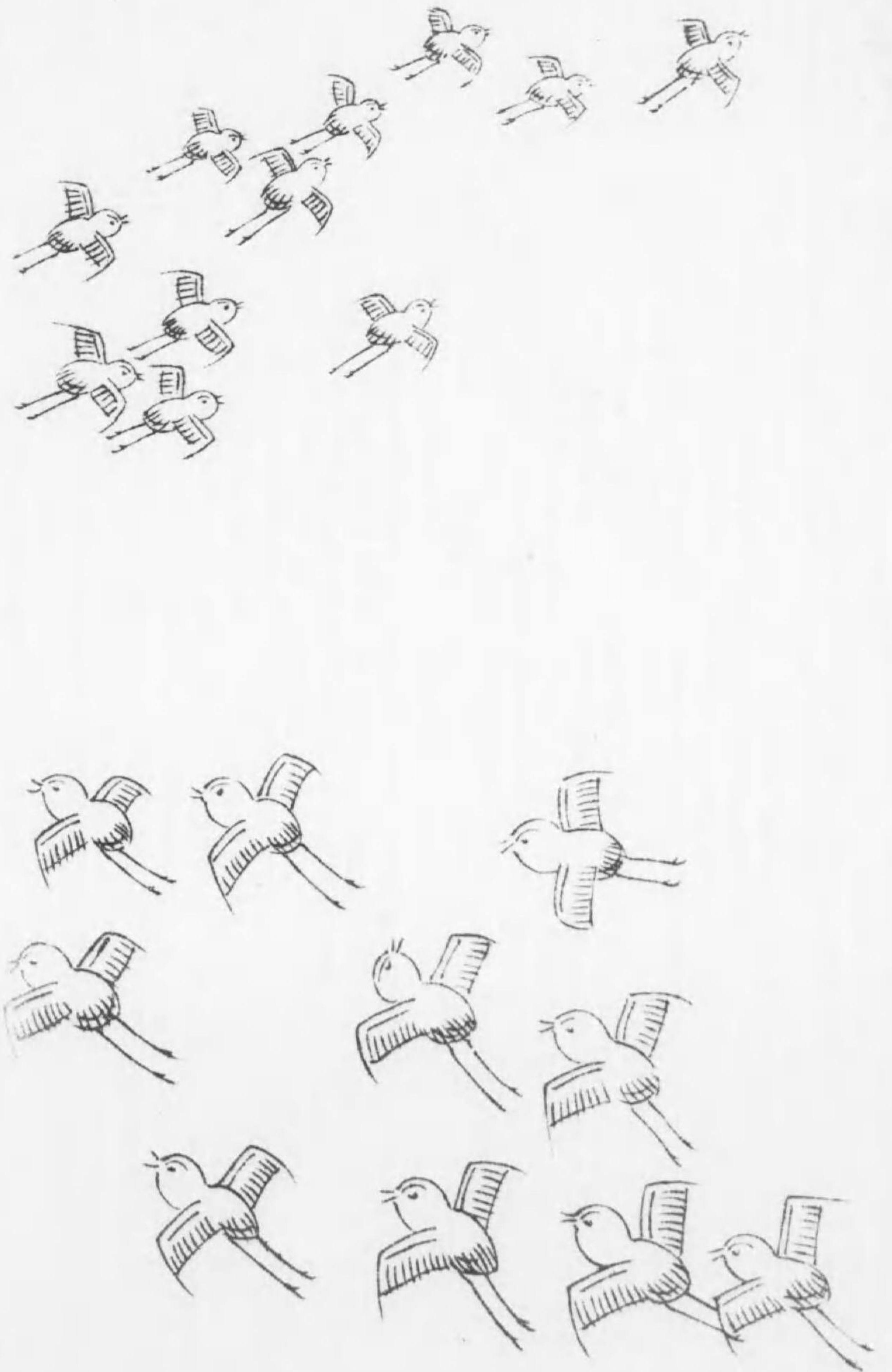
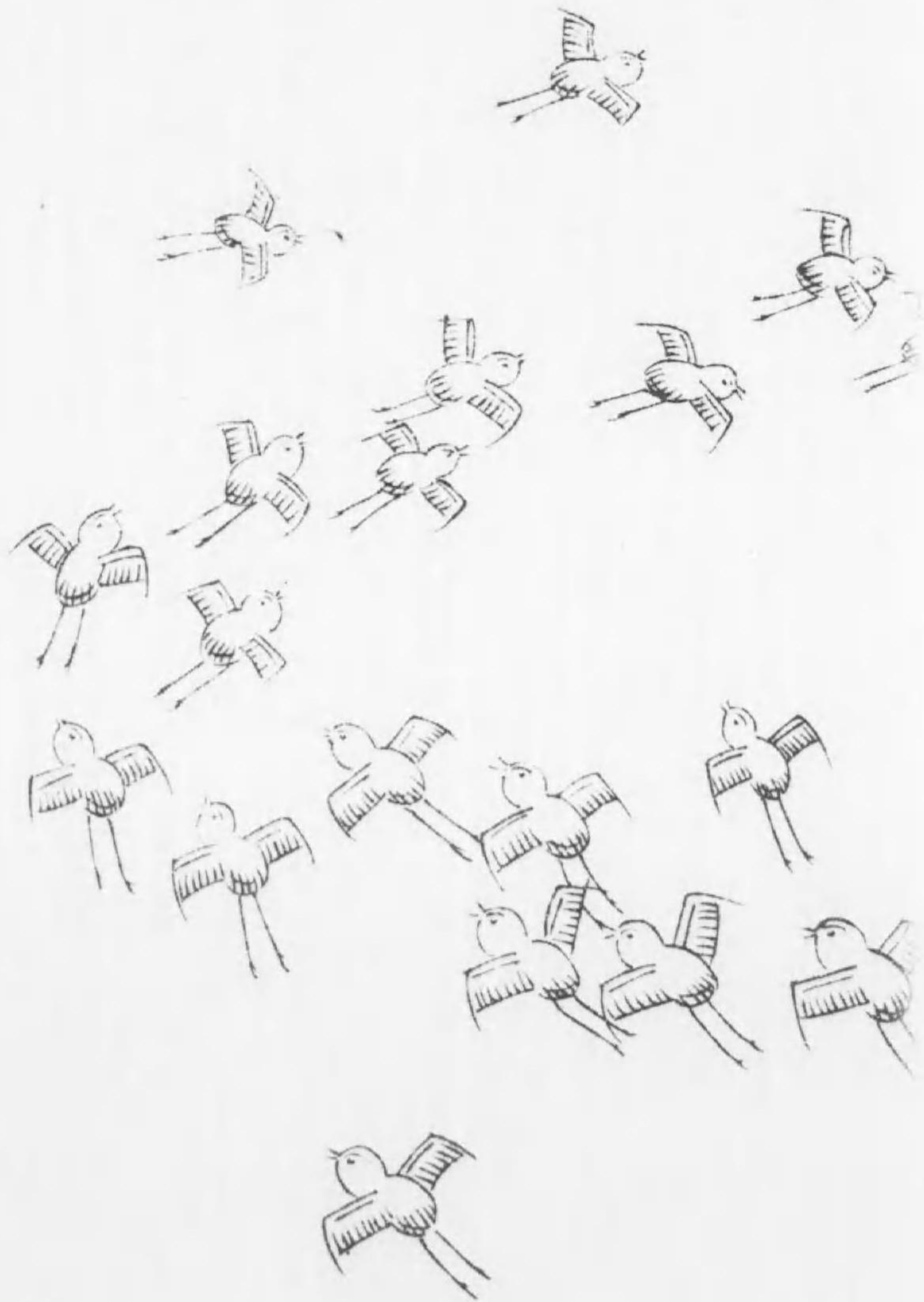
姨捨

柏崎

阿漕

觀世流改訂謄本

内六



特116
697



清觀
長世



竹生島

解題

官人竹生嶋に詣て、奇特を拜する事を作れり。明和の二百十番謡目録に金春藤竹の作と記せども古記に據るところ無し。

能之小書

翁附の協能に演せらるゝ時はシテの出に「釣の營みいつまでか隙も波間に明け暮けん」(白髭)の入れ句ありてサシに續く。總じて常よりも位重し。

謡ひ方便概

協能としては軽き方なり。重くなるは却て宜しからず前段の初を序に、半より破に、後段を急に謡ふべし。

シテ

前は常の漁翁と略同じ位にて、靜に少しく抑へて謡ふ。サシは稍さらりと明かなるべし、一聲にて位を少し大らかに取り、寛りと節廻しを長閑に扱ひ、次のサシより再びさらりとなる。下歌は調子を更へて聊かゆるめに謡ひ、上歌は程好き運びにて、晴れ々々と謡ひ行く。ワキとの問答は老人なれば靜に落着きてあるべきも、さまで位取るに及ばず。「船が着いて候」以下の詞は、神前に參る處なれば前の詞とは心持を更へ、殊勝にして稍確りとあるが如し。後は「本より衆生」云々の一節地よりもゆるめに位を取りて健やかに謡ふ。

ツレ

前段一人にて謡ふ處はシテよりも高く輕めにどり、同吟の處は凡てシテに従ひて謡ふ。後は協能の天女なればさらりと謡ふ中にも確りと大きな處あるべし。

ワキ

素謡にては一人。力有りてさらりと淀み無く謡ふを旨とす。

地

「名こそさ、波や」云々は出の高くならぬやうに注意して稍靜に謡ひ、「處は海の上」よりさらりとなり、展望の心を謡ひ表して春光洋々たる概あるべし。「魚木に上る」云々の地はシテの氣を承けて健かに且つ朗かに謡ふ。「辨才天は女體にて」云々はさらりとあるべく、クセにて前よりも少しく緩めて出、漸次運びをつけて謡ひ行くなれども、クセ止メは中入なれば粗末に流れぬやう心すべし。後は龍神物なれば總じてこせくするを嫌ひ、大きく健やかに淀み無く扱ふを旨とす。此心得にて「御殿類に」以下さらりと謡ひ、「其時虚空に」云々は餘り早めず、「夜遊の舞樂も」より少しく位を進め、以下キリへかけて好く乗つて謡ふべし。

辭解

竹に生る、鶯

竹生島の名に因みていふ。萬葉集に「竹の林に鶯鳴くも」入雲御抄に「鶯の巢はなべては竹なり」など見えたれば鶯といひかけたり。竹生島

近江の國琵琶湖内にあり。島内に竹生島神社、竹生島辨天堂あり。島名の由来には諸説あれど何れも確ならず。延喜 醍醐天皇の年號天下太平 明神 竹生島神社の命を祀ると傳ふ。辨才天を本地に立つるは中世以降の事なり。四の宮や 喜第四宮(重明親王)此所にまします故に、此關のあたりを四宮河原といふなり。伊勢物語に「山階のせんしのみこ(仁明天皇第四子)その山科の宮に瀧落し水はしらせなごしておもしろく作らせたる」又山州名跡志に「山科郷内に一二三四の宮あり。當社(諸羽神社)其第四なる故に號之」と見ゆ。延喜第四宮の宮址なりといふ説當れるが如し。昔は櫃川南に流れのたるより「河原の宮居」といへども其河原今はなし。此所には河原の語を承けて末の水流早きを末早きといへり。名も走

井 枕草子に「逢坂は胸のみ常に走り井の見附くる人やあらむと思へば」後拾遺集に石山よりかへり侍りける道にはしり井にて清水を詠み侍りける」と詞書して「逢坂の關とはさげぞ走井の」云々とあり、走井は吹上井の意にて之を固有の名とする事いはれな。曇らぬ 水に映れる月の曇らぬを御逢坂の關の宮居 聖代

山越 京都北白川より登りて如意の 鳩の浦 琵琶湖 便船 船に便乗 彌生 三月の、うらら、うらら

りさわざ 物憂き世渡り。船の縁 uringu 魚。數をつくして 魚をとれるだけとりて我が身

意。數「ひと 佗び人 世の中を佗び ひとまも浪間 暇無きを浪間 同じわざながら 業を營む

つ「共に縁語。浦山かけて 浦から山 志賀の都 天智、弘文兩帝の都。今の 花園 天智帝

優れて良しとの意。昔ながらの山櫻 千載集に「ささ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな」とある

造られし遊覽 地といふ。昔ながらの山櫻 千載集に「ささ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな」とある

方に聳 眞野の入江 新續古今集に「舟よば眞野の浦波はるく」と云々とあり。入江は古へ異さし

よせ 棹さし寄 誓の舟 佛が衆生を救ひて彼岸に渡 神慮も 神の思はくも如何 迎への舟 佛が

に導かんとて衆生を迎ふ 法の力 「乗り」に掛けて、法力 の功德なる旨を述べ。名こそさなみや ささ浪といへども名の

立たすとの意。ささ浪は古事記に「追迫敗出沙々那美」ともあり 國は近江の 國の名も江に近きとい

て古くは湖邊の地名なりしを、後に滋賀の枕詞に轉用したる語。 國は近江の 國の名も江に近きとい

々に言 降るか 今降れる雪かそれとも冬より残 時知らぬ 伊勢物語に「時知らぬ山は富士のねいつ

ひ積く 降るか 今降れる雪かそれとも冬より残 時知らぬ 伊勢物語に「時知らぬ山は富士のねいつ

あるを引く。常に雪のふりつみあて時節に關係なき富 さえかへる 再び寒くなり返る事。春なれど比叡の

士山を都の富士の稱ある比叡山に引きあていふ。 雪を見て斯く思ひつづけたる心。

比良のね 近江滋賀郡に在りて 雲居のよそに 千載集に「知らざりき雲井のよそに見し月の影を

離れたるをいふ。こゝには旅の習なれば鄙 なれ衣 着馴れたる衣。親し 浦を隔て、 衣の縁にて裏の

人も都の人も同船して知り合になるの意。 浦を隔て、 衣の縁にて裏の

いふ。浦より 縁樹影沈んで 僧海國の櫻陰腐談に「縁樹影沈魚上木、月浮海上二兔奔流その幽邃みる

隔りてなり。 縁樹影沈んで 僧海國の櫻陰腐談に「縁樹影沈魚上木、月浮海上二兔奔流その幽邃みる

あり、又一説に建長寺の僧自休の作にて第二句「清波月落 辯才天 別に辨財天ありて彼此相混せらるれど、此

免奔浪」といふ。月中に免住むと傳ふるより作れるなり。 辯才天 別に辨財天ありて彼此相混せらるれど、此

はる、源平盛衰記に「天女と申すは即大辯才功德天女是なり(中略)能美妙の音楽を調ふ。左の掌を舒ては三昧

(又平家物語にも出づ)とあるに觀ても辨財天に非ざるを知る。金光明經大辯天品に依れば、辯財天は女神にして、所謂七福神の一なり。女人禁制 修道の障りとなるが爲靈地に

久成如來 もと九生如來とあれど九生の語なし。謠曲拾葉抄に引きたる竹生縁起の詞の中には「九上如來」の語あれど此引文は該縁起に無し。惟ふに久成なるべし。觀世流寶生流にては「キウシヨオニヨライ」といへど下懸諸流にては「クジヨオニヨライ」と謠へり。後者の方當れり。久成は久遠實

成の略にして、久遠却以前に實に成佛せる事を表はす語、即ち、釋迦の伽耶近成に對する五百座點却已削の成佛の如き、彌陀の十劫成道に對する久遠の古佛の如し。源平盛衰記、平家物語共に「往古の如來、法身の居士なり」とあり、之を言ひ換へたるものと覺ゆ。如來とは佛の事なり。竹生島縁起に本地は彌陀とあり。久遠彌陀な

參るべけれ」とはい。それまでも 如來までには及ばず。辯財天 あらた 靈驗ある事。天女と現じ 源平盛衰記に「紫磨の姿を隠して和光の道に出で給、假に端嚴の女身を莊て」悲願 衆生を救はんとする大悲悲心とあり。又竹生島縁起に辯財天女示現等の語もあればいへるなるべし。利生 衆生を利益する事。荒磯島

生せしむる願を指す。正覺 佛のし、つ、うわう 此語無し。惟ふに假名の誤傳なるべし。立ち歸り 波の立つを翁の立ち歸るにかく。月光り 日光月光並びに山の端を出づかほごまでに疑ひもあらじと。かへすくも 袂を返すに掛く。夜遊 夜の歌舞。龍神 海中に在りて雨水を司る神。人間界 まれ人 客。本より 佛は本より衆生を濟度す。を其誓願とすればいふ。さまぐ 濟度の方便が多種なる意。有縁の衆生 縁ある人例へば如。天地に 龍神が奇特を示せるかたちなり。龍宮 龍王の住む宮殿。

裝束附

前シテ (漁翁)

面笑尉又は朝倉尉、尉髪、襟淺黃、着附小格子厚板、茶紐水衣、緞子腰帶、尉扇、棹。

後シテ (龍神)

面黒髭、赤頭、輪冠、龍戴、赤地金緞鉢卷、襟紺、着附厚板、半切、法被、縫紋腰帶、打杖、火焰玉(盤に載せて持つ)

前ツレ (女)

面連面、鬘、鬘帶、襟赤、着附摺箔、色入唐織着流、扇。

後ツレ (辯才天女)

面連面、黒垂、天冠、着附摺箔、白大口又は緋大口、長絹又は舞衣、縫入腰帶、天女扇。

ワキ (大臣)

大臣烏帽子、赤上頭掛、着附厚板、白大口、袷狩衣、紋付腰帶、扇。

ワキツレ (從者二人)

大臣烏帽子、蒲黃上頭掛、着附厚板、白大口、赤袷狩衣、紋付腰帶、扇。

脇能

竹生島

三月

ツレ 辯才天(前ハ女)
ワシテ 龍神(前ハ漁翁)
官人

早次第上(健流ニナク)

(ツヨク 柏子合)

竹生島 鷺の竹生島 鷺の竹生島 鷺の竹生島

代又仕へ奉る。臣下あり。諸も江州竹生

島の明神ハ。靈神とて。諸座の向此度

君より。暇を申し。唯今竹生島より。素

詣仕の。道の。上の。明神。運。の。宮。や。河原の。宮。居。末

竹生島

は。あ。の。原。の。宮。居。ま。は。き。も。き。井
打切
 の。水。の。目。曇。ら。ぬ。代。は。逢。坂。の。園。の
(カサ)
 宮。居。を。伏。し。拜。み。山。越。せ。志。賀。の。里。
(カサ)
 鳩。の。浦。も。著。き。は。つ。鳩。の。浦。も
(カサ)
 つ。ま。は。つ。程。は。鳩。の。浦。も
ワキ
 著。き。は。つ。も。つ。見。つ。釣。舟。の。来。つ。ら。
(ニ)
 暫。ら。く。相。待。ち。便。船。を。さ。や。な。る

シテサエ (朗カニ流シテ)

一声 (コイ合) (拍子下)

あ。も。ろ。や。頃。は。弥。生。の。半。あ。は。浪。も
 う。ら。は。海。の。面。霞。み。渡。れ。朝。ぼ
シテサエ上 (長閑ニ覽リ)
 ら。け。長。閑。は。浦。は。舟。の。道。う。ま
シテサエ上 (健ニサナリ)
 わ。さ。あ。あ。い。あ。あ。こ。れ。は。此。浦。里。は
打上
 信。女。馴。れ。て。明。暮。運。ぶ。う。ら。の。敷。を
ト
 つ。し。て。身。ひ。と。つ。ち。助。け。や。せ。ん。と。位
ト
 人。の。ひ。ま。も。浪。向。は。明。け。暮。れ。て。せ。や

ツシカニ上(サマ)お舟フネをカ来キらせん早(健)嬉ウレシやサさシら
 迎ムカの舟フネ法ホウの力チカラとト鹽シホ見ミえたりシテ初(氣ヲ起シテ)けケら
 殊コト更サ長サ閑サもカ心ココロよヨかカるル風カゼもモあアー
 名ナこコそソとトさサあアみミやヤ志チ賀カのノ浦ウラよヨあアまマらラ
 地下歌カミテ中(静ニスラリ)あアみミやヤ志チ賀カのノ浦ウラよヨあアまマらラ
 (拍子合)あアるル都トへヘ痛イタむムやヤおオ舟フネよヨ召メさサれてテ
 浦ウラをヲ眺ヒめメ給タへヘやヤ所トコロのノ海ウミの上ノ所トコロのノ春ハル
 海ウミの上ノ國クニのノ花ハナのノほホよヨ思オモはハれレおオのノ春ハル

●蜀吟

あアれレやヤ花ハナのノほホよヨ思オモはハれレおオのノ春ハル
 時トキ知チらラぬヌ山ヤマのノ都トのノ富トヨ士シあアれレやヤ猶ナホ
 さサさサあアるル春ハルのノ日ヒよヨ七ナナ良ラのノおオおオろロ
 吹フくクもモもモ中ナカ漕カウぐグ舟フネよヨもモ盡ツキきキらラ
 旅タビのノあアらラびビのノ思オモはハれレおオのノ春ハル
 見ミるル人ヒトもモおオのノ舟フネよヨあアれレ衣イ浦ウラをヲ隔ヘ
 てテ行イくク程ハジはハ行イ生ナ島シマもモ見ミえエたりリやヤ

竹生島

四

緑樹(健ニ引立テ)影分(地)はんで(朗カニ運ビテ)魚(カ)本(キ)は登(バ)の氣色(シ)
 あり。月(ス)海(ス)は浮(カ)あんで(イ)鬼(キ)も浪(イ)や奔(ハ)
 っが面白(シ)の島(ノ)のけ(イ)もや。舟(フネ)著(シ)
 して(イ)は(ア)あがり(イ)へ(イ)あ(ハ)嬉(シ)や頓(ガ)て
 神前(シノ)へ来(キ)つ(ク)ら(シ)へ(シ)此(コ)尉(ヰ)が(ガ)道(ミチ)ま(マ)る(ル)へ
 申(マウ)な(ナ)も(モ)や(ヤ)い(イ)も(モ)て(テ)い(イ)も(モ)を(ヲ)辯(ベン)才(サイ)夫(フ)は
 へ(ヘ)く(ク)い(イ)も(モ)く(ク)志(シ)新(シン)念(ネン)い(イ)へ(ヘ)承(シヤウ)り(リ)及(キ)び
(氣ヲカヘテ)

なる(カ)より(リ)も(モ)い(イ)や(ヤ)勝(マ)り(リ)と(ト)あ(ア)り(リ)が(ガ)な(ナ)ま(マ)い(イ)。不(フ)思(シ)
 議(ギ)や(ヤ)此(コ)島(ノ)ハ(ハ)女(メ)人(ニ)禁(キン)制(ゼイ)と(ト)こ(コ)を(ヲ)承(シヤウ)り(リ)て
 い(イ)も(モ)あ(ア)り(リ)あ(ア)る(ル)女(メ)人(ニ)に(ニ)何(ナニ)も(モ)を(ヲ)来(キ)ら(シ)て(テ)い(イ)も(モ)を(ヲ)
(殊勝ニ確リ)そ(ソ)の(ノ)知(チ)ら(シ)ぬ(ル)人(ニ)の(ノ)申(マウ)事(シ)も(モ)て(テ)の(ノ)承(シヤウ)く(ク)も
 此(コ)島(ノ)ハ(ハ)久(キウ)成(シヤウ)如(ニ)来(ライ)の(ノ)告(コウ)再(サイ)証(テイ)あ(ア)れ(ル)バ(バ)殊(シ)は
 女(メ)人(ニ)こ(コ)を(ヲ)来(キ)る(ル)べ(ベ)ナ(ナ)れ(レ)の(ノ)う(ウ)そ(ソ)は(ハ)ま(マ)で(デ)も
(地上)あ(ア)る(ル)もの(ノ)や(ヤ)辯(ベン)才(サイ)夫(フ)ハ(ハ)女(メ)人(ニ)體(テイ)ま(マ)て(テ)辯(ベン)
(柏子舎)

竹生島

五

トけあき
抑こゝれ此島よきんで

神や教ひ國を守り
辯才天と我事

あり其時
虚室よ音楽聞え其時

虚室よ音楽聞え
花ありくだる春の

夜の月よ輝く
少女の袂かへむおも

おもしらや
夜遊の舞樂も時過

ぎて
夜遊の舞樂も時過ぎて月まふ

地拍子
龍神現
獨吟

渡る湖づらよ
浪風頻り鳥動して

下界の龍神現れたり
龍神湖よ

出現して
龍神湖よ出現して光も

輝く
金銀珠玉を彼のまはくは捧ぐる

けしきありかたかりける
青持あ

本より衆生
濟度の誓言本より衆生

竹生島

仕舞
勸
打上げ返

濟度の誓言
あまの天女の

かなもちを現^カ。有^ク縁^ユの衆^{シヨ}生の所^{シヨ}願^カや
 かなへ。又^カ下^ゲ界^{カイ}の龍^{リウ}神^{シン}とあつて。國^{クニ}土^{ツチ}を
 鎮^{チン}め。お^カ言^{コト}をあら^カ。天^{アメ}女^メの宮^{ミヤ}中^{ナカ}よいらせ
 給^{タマ}へ。龍^{リウ}神^{シン}はま^カあ^カち御^{ミコ}水^{ミヅ}よ飛^{トビ}行^{ユク}して。
 波^{ナミ}をけ^ケた^タて。水^{ミヅ}やあ^カへ^カて天^{アメ}地^チよむ^カら^カが
 大^{ダイ}蛇^ゼのあ^カた^カち。天^{アメ}地^チよむ^カら^カあ^カる大^{ダイ}蛇^ゼの
 かな^カた^カち。龍^{リウ}神^{シン}よも^カん^カで^カぞ。み^カり^カよ^カひ^カる。

朝長

解題

もと朝長の傳なりし清涼寺の僧、朝長の遺跡を吊ふことを作れり。歌舞體腦記に曲名見ゆ。能本作者註文、二百十番謠目錄等に世阿彌の作と記したれども申樂談儀世阿彌作曲中に無し。

能之小書

變式の能、儼法は太鼓方にて頗る重き習事なり。太鼓の調べ方及出端の手常と變り、後シテくなり、ワキはシテ中入後大崩の戦を語る。されど謠の文句には異なる處なし。又三世十方の出と稱する小書もあり。

謠ひ方便概

實盛、頼政と共に三修羅の一にして位頗る重き曲なり。前後兩半其仕組を異にし、各別種の趣致を謠ひ分け、總じて品好くして強みに健かなるを宜しとす。

シテ

前は深井の面をかくる程の女なれば、其心ばえ若からず。且は二番目物にして現在物なれば優弱に流るるうちに確りとしたる處有るべく、中に就き、借は取り分きたる云々はワキの氣を承けて、かゝつて出づ。語は

朝長自刃の次第を女が語るものなれば、其心にて大體靜に確りとあるべきも、心持緩急多ければ、篤と稽古あるべし。「さん候」これよりクドキの調子に更へ、十分に籠めて沈み勝ちに謠ふ。「御僧に申候」以下の詞は心持を改めて懇に言ひ、「誰かある」云々は調子を上に取り、離れて謠ふ。後は品位を保ちて聲少しく若やかに確りと謠ひ、餘りに勇壯なるを好まず。「あらありがたの」云々のサシは荒々しくならぬやう確りと謠ひ出し、「頼もしや」より一聲の調子に更へて位を大きく、「楊枝淨水」云々は確りと謠ひ、次のワキとの掛合より段々に穩健なるべし。クリは強く確りとして運びあり、サシも略同じく「思はざりにし」云々は少しく抑へて靜に上端は位大きく謠ふ。ロンギは力ありて弛み無きが宜し。稍高めに謠ふ。

ワキ

朝長の跡を弔ひに赴くものなれば、總じて浮きやかにならぬやう、靜にして位を持つ程の心あるべし。シテ出で、よりは稍さらりと扱ふを宜しとす。「朝長も」の地渡しは聲を籠めてしつとりと渡す。「さて

も幽霊以下大事を取りて、殊勝に確りとあるべし。ワキヅレは凡て重ワキの心得を受けて諺ふ。

地 「死の縁の」云々は無常の心を含みて、極静にしつとりと荒寥たる氣色を諺ひ表すべし。「これを最期の」云々は更へて静にかゝつて附け、「よその見る目も」より緩めて鎮める。「悲しきかなや」の一節は前よりも稍下目に取りて、しつとりと寂しく諺へど、初の地よりは少しく張りて諺ひて宜し。「かくて」は道行なれば心持を更へ、以下静に確りと諺ふ。後はどつしりとして運び好かるべし。クセは少しく位を取つて確りと諺ふ。此内「いかなれば」より氣を更へ、上端後は前よりもさらりとなる。ロンギはがしりと諺ひ、「旗は白雲」以下氣を乗せて、強みに確りと扱へど位の走るを好まず。

辭解

嵯峨 山城國葛野郡、清涼寺 淨土宗。俗に嵯峨の釋迦堂と呼ぶ。僧寂然入唐して傳來したる梅檀一木の釋迦の像を安置せるを以て名高し。平治

の亂 源義朝、藤原信賴と結び平清盛の熊野參詣の不在に乘じ、義朝敗軍して京都を立ちのきたる事。大

夫進朝長 大夫は五位の稱、朝長時に從五位下、中宮進た。青墓の宿 美濃國不破郡。熊坂にも「垂井青

長、墳墓は青墓村の。御ゆかりの者 縁故ある者。瀬田、鏡山、老曾 京都より美濃に至る途。伊吹 近江

濃との境。不破の關 美濃國不破郡關原村大字杉尾の大木戸坂に關址あり。花の跡 雪の如き落花を見るにつけて最早散りたる梢を訪ふ松風も恨めしとなり。朝長の死を

惜む。青墓の長者 長者は宿の長、長者の娘を略して長者といへり。平治物語に「かの長者大炊が娘、延壽と

草の露 草露水泡をはかなきものゝ例に。人の歎きを 歎きを見と云ひかけて身の上に續く。朝長

穂に出す 思ふ事を外に現はすこと。花薄は穂の序。光の陰を 光陰を惜しめども月日の數を経ての意。「程ふりて」といひて「雪」の語を

起す雪のうちに 古今集の「雪の内に春は來にけり鶯の氷れる涙今や解くらん」を引く。解けて 打解けて安眠せざれば今は夢にすら見ずとなり。御めの

と 御傳役。乳母 ゆかり 故 抖擻行脚 煩惱を拂ひて佛道修業の爲回國すること。あへなく 頼みが三世的御値

遇 主従は過去、現在、未來の三世を通じて因縁ありとの意。一樹の蔭 説法明眼論に「宿一樹下、汲一河流」皆是先世結縁とあるを汲むも他生の縁なほ深し」と出でたるに據れるか。他生の縁とは

來世に遇ふべきかよりあひの意。それ故に「二世の契」といへり。死の縁の 二人が偶行き逢ひたるも、一は逢ふ(青)の音に、一は墓の音に、何れも其意通じたりとの心にて、青墓の地名に續けたり。跡のしるし 墓の意。前の墓の語に續けて朝長の墓を起

野原 名所方角抄に「青野原は垂井より五町許。淺茅原 春まだ淺き頃なれば若草も萌出でず古葉ばかりに東なり。此原を過ぐれば青墓の宿なり。鎌田

北邨 もと支那の山の名。漢以來墳墓の地となりたるため、墓地、火葬場等の義に轉用す。萩の枯葉を焼

義朝股肱の臣、名は此諺並に保元物語などには正清、平治物語には正家とあり。金王丸 義朝の野間の内海 尾張國知多郡にあり。今は野間村

庄名にて内海邊まで包有せしなり。都大崩 京都より近江に出づる龍華越の山路をさす。卯月本には「都大崩とやらんにて」とありて大崩れたる嶮崖の通稱なり。これを

「都の大敗北」の意とするは誤解なり。膝の口 膝が御自害 平治物語に依れば朝長は父義朝に斬

次がら。犬死 路傍の犬の死の如き死に方。御先途 將來のゆひかひなき。草徑 草の小道

亡骨 亡骨の語無し。白骨の誤か。若し誤。十方 四方四隅上下宮仕へ 此にては觀音懺法の略、罪科を

懺悔する儀式の意。観音懺法は宋の天竺寺遊式法師が請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼經に依りて作られたるものなり。天台宗曹洞宗等に觀音の眞前にて之を讀みて供養し祈禱追吊報恩の爲に行ふ法要なり。鈸鼓

讀經の時に鳴らす鈸鼓と太鼓。鼓は亦時を報する具なる故「時」に云ひかく。後夜の 前四時 昔在靈山名法華 觀音懺法中の文にあら

南岳慧思禪師の作と云ひ傳ふれども審ならず、法華と念佛とを一致せしめんが爲天台宗の人の作りしものか、昔

釋迦牟尼如來として靈鷲山に在りて法華と名づくる經を説きしが今は西方極樂淨土にありて阿彌陀佛といふ。

更に衆生を救済せんが爲觀世音菩薩となりて此娑婆世界に現はれ、過去現在未來の三世に 吾今二點 觀

互りて一切衆生に利益を與ふ。此釋迦彌陀觀音の三尊は別體にあらず同一體なりとの意。 吾今二點 觀

懺法中の三我今の偈文「我今已具楊枝淨水唯願大悲哀憐憐受、我今再獻楊枝淨水唯願觀音哀憐憐受、我今三點楊

枝淨水唯願薩埵哀憐憐受」の第三句を引く。觀音の前にて行者が左手に水を入れたる淨器を捧げ右手に楊柳の枝

を持ちて此文を唱へ三回水を灑きて供養し以て觀音の加護を祈るなり。三點とは三回の意。曹洞宗にては此文

を宋音にて讀む故に茲にも其れに倣ひて宋音を用ふ。但し三點はサンタンにあらずサンチャンと讀むなり。

玉文の瑞諷 吾我三點の文を讀むこと。玉文に對せ 感應肝に銘ず 衆生と佛菩薩と至誠の心の互に

裡に刻みつ 念の珠 念珠。即ち數珠。朝に紅顏 和漢朗詠集に「朝有紅顏誇、弓馬の騷 亂 嫡子惡

きたること 源太 義朝の長男十五歳の時叔父義賢を殺したるが爲世人呼んで惡源太 石山寺 近江國滋賀郡 兵衛佐

頼朝。義朝敗戦の時十三歳。彌平兵衛 平宗清。頼朝の目代として尾張に在り、長田 正清の妻の父。やみやみと

々 義朝は長田に謀られて 一切の男子 梵網經に「一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が一

湯殿にて討たれたり。母、我生々に是に従て生を受けざること無し」とあるに據る。一

乗の功力 妙法の 瞋恚の甲冑 佛教にては怒りは他を害するものなれば三毒の一とす。梓弓 「も

怒は恐しげに外貌に現はるゝものなれば甲冑に喩ふ。 敵に合竹の 敵に逢ふを「合

詞。玉きはる 「命」の枕詞なれば茲 修羅道 六道の一、常に闘戦を のみ事とする世界。 敵に合竹の 竹」に掛く。合竹

は音樂の詞、笙の管を數本同時に吹き合すこと。竹の 白雲紅葉 源氏の白旗、平家の 赤旗を喩ふ。 のぶかに 矢の根難

節と節との間を「よ」といへば次の此「世」の序とす。 儀の手 傷 修羅道に「落つ」るを遠近 に掛く。遠近は遠國の意。

装束附

前シテ (青墓の長者女)

面深井、鬘、鬘帶、襟白淺黄又は白二つ、着附摺箔、無色唐織着流、木の葉、水晶の珠數。

後シテ (源朝長)

面中将又は今若、黒垂、梨打烏帽子。白鉢卷、襟白淺黄、着附縫箔又は厚板唐織、白大口又は色大口模様

大口にも、單法被又は長絹、縫紋腰帶、太刀、修羅扇。

ツレ (侍女)

面連面、鬘、鬘帶、襟赤、着附摺箔、赤地唐織着流。

トモ (從者)

着附無地熨斗目、素袍上下、小刀、鎮折扇、太刀持。

ワキ (清涼寺の僧) (ワキツレ) (從僧)

角帽子、着附熨斗目、水衣、腰帶、扇、珠數。(大口を穿くこともあり)

二番目

朝長

正月

前前前
ツツツ
レレレ
ワキツレキ
從僧
從僧
長者
長者
女
女
者
者
後
後
シテ
シテ
朝長
朝長
亡
亡
靈
靈

早行(慎重)

この嵯峨清涼寺より出てたる僧
よて。さても此度平治の乱。義朝
都を逃る。中にも大まの進朝長は。
美濃の國青墓の宿にて自害。はて
給ひたる由承りぬ。われらも朝長の所
縁の者よて。程よ。急ぎおの處より。

朝長

跡も吊ひ申さしと思ひまきての
(大キク)

近江路や瀬田の長橋うち渡り瀬田
(ヨウケ)

の長橋うち渡り猶行く末鏡山老蘇
(前ヨリ運マテ)

の森を打ち過ぎて末は伊吹の山風の
(打切)

不破の閑路を過ぎ行き青墓の宿よ
(打切)

著きよけり青墓の宿よまよけり
(物寂シクシツトリ)

花の跡よ松風や花の跡よ松風や
(拍子合)

雲も恨みあるらん
(拍子不合)

の長者よその草の露水の泡
(三人)

はあまのたぐひも哀をさるは
(三人)

習あるよこれの殊更思をむも人の
(三人)

歎や身のうへよあはる涙の雨とのみ
(三人)

萎む袖の花薄穂よ出まへま言の
(三人)

葉もなくとありある有様か
(拍子合)

あらけあぐ(カ)鼓(タ)く音(ネ)も誰(タ)あらんこと
 尋ねよ(カ)鎌田殿(タ)と仰せられ一程よ
 内(カ)を聞かまはれが(カ)武器(モ)たる人四五人(カ)
 内(カ)より給よ(カ)義朝(タ)は親子(コ)鎌田(タ)金五(タ)
 丸(マ)とやらん(カ)あらまを頼(タ)みおほめも
 明けあぐ(カ)舟(フネ)の野向(ノ)の内海(ウチノウミ)へ
 舟(フネ)落あぐ(カ)わらあぐ(カ)又朝長(タ)の都大船(トヨオホフネ)

舟落あぐ

まを膝(ヒザ)の口(クチ)を射(イ)させとあぐ煩(ワザラ)ひ給ひ
 一(ヒト)より(カ)便更(ヨク)け人(ヒト)静(シヅ)まつて後朝長(ノチノチノチノチ)の序(シヨ)
 聲(コエ)まて南無阿弥陀佛(ナムイハフツブツ)南無阿弥陀佛(ナムイハフツブツ)
 佛(ブツ)と(ト)聲(コエ)のたまよ(カ)鎌田殿(タ)来り(キ)ころ(カ)
 いま朝長(チヨウ)の志(シ)自害(ジガイ)いと申(マウ)させ給へば
 義朝(タカチヨウ)を驚(オドロ)まき(カ)皆(みな)入(イ)む(カ)は(カ)や(カ)肌衣(ハダキ)
 も紅(ベニ)は(カ)深(シ)みて目(メ)もあてられぬ有様(アリサマ)

月長

地拍子
見ると目も

つきて。歎かせ給ふ所有様か。よその見
 目も哀さやうつら忘れん。悲き
 かあや。弁を求むれば。苔底が朽骨見
 やるもの。今更は無し。さて其聲を
 尋ぬれば。草徑に亡骨とありて。谷
 あるものも更よあ。また世十方の佛陀
 の聖衆も憐む心あるあらむ。亡魂坐

小書ニヨリ
 更よあ
 此打切ニ習
 アリテ三
 世十方のノ
 句本地トナ

市僧中
 三行(兼ラカヘテ懸ニ)

霊もさこそ嬉しと思ひまき。かくて
 陽影うつる。かくてみ陽影うつる。
 雲絶え絶えよ行く空の青野の原の
 露分けて。彼の旅人や伴ひ青墓の
 宿よ。帰りけり。青墓の宿よ。帰りけり
 市僧よ申す。目も苦しくいづも。暫らく
 して。おぼし留りて。朝長の所あり

心静し吊ひ糸をたてて入真（奥直ニ）

志ありおたよる暫らくしてよる

シテ（上ニ取リテ）

（落著ヨク）

誰ある羅の出ては僧の官仕申し入（中入）

早カレ上（位ヲ持チテ確リ）

朝長の
トモ

（拍子不合）

さても幽霊朝長の佛事の様と多

早ツレ（サテラレ）

けいどもとりあきて者の貴み給

早

上歌

（珠勝シツカリ）

ひ観音懺法讀み奉り（持話）聲満（拍子合）

つや法の山あせ目更けては法の山あせ（打切）

目更けて光和らぐ春の夜の眠を覺（前ノ拍子）

まき鉦鼓時もうつるや後夜（シマレ）の鐘音（前ノ拍子）

澄み渡のちりからの法（シマレ）の夜聲（シマレ）感（シマレ）

涙も浮むさありの氣色（シマレ）あ浮む（シマレ）

後シテ上（落著ヨク）

さありの氣色（シマレ）あ（出端）あらありが（拍子不合）

たの懺法（シマレ）や昔在靈山（シマレ）名法華（シマレ）

今在西方名阿彌陀（シマレ）安（シマレ）安（シマレ）示現觀（シマレ）

眞(漸次ニ氣ヲ東セテ)の姿(確リ)と眼(地上歌)と見(拍子合)と隠(拍子合)と

面影(拍子合)のあ(拍子合)れ(拍子合)も(拍子合)い(拍子合)も(拍子合)形(拍子合)や

消(拍子合)え(拍子合)あ(拍子合)ま(拍子合)り(拍子合)形(拍子合)や消(拍子合)え(拍子合)あ(拍子合)ま(拍子合)り(拍子合)消

え(拍子合)ま(拍子合)り(拍子合)い(拍子合)ろ(拍子合)燈(拍子合)火(拍子合)を(拍子合)看(拍子合)み(拍子合)あ(拍子合)ま(拍子合)り(拍子合)朝(拍子合)長(拍子合)を

共(拍子合)に(拍子合)憐(拍子合)み(拍子合)て(拍子合)深(拍子合)夜(拍子合)の(拍子合)月(拍子合)も(拍子合)影(拍子合)添(拍子合)ひ(拍子合)て(拍子合)光

陰(拍子合)を(拍子合)惜(拍子合)み(拍子合)給(拍子合)へ(拍子合)や(拍子合)け(拍子合)よ(拍子合)時(拍子合)人(拍子合)を(拍子合)また(拍子合)ぬ

浮(拍子合)世(拍子合)の(拍子合)習(拍子合)あり(拍子合)唯(拍子合)何(拍子合)事(拍子合)も(拍子合)う(拍子合)ち(拍子合)捨(拍子合)て(拍子合)。

拍子扱
二持
深夜の

法(拍子合)を(拍子合)説(拍子合)う(拍子合)せ(拍子合)給(拍子合)へ(拍子合)や(拍子合)法(拍子合)を(拍子合)説(拍子合)う(拍子合)せ(拍子合)給

へ(拍子合)や(拍子合)そ(拍子合)れ(拍子合)あ(拍子合)な(拍子合)ま(拍子合)紅(拍子合)顔(拍子合)あ(拍子合)つ(拍子合)て(拍子合)。

世(拍子合)路(拍子合)よ(拍子合)ほ(拍子合)い(拍子合)ま(拍子合)り(拍子合)も(拍子合)み(拍子合)み(拍子合)白(拍子合)

骨(拍子合)と(拍子合)あ(拍子合)つ(拍子合)て(拍子合)郊(拍子合)原(拍子合)よ(拍子合)お(拍子合)ち(拍子合)ぬ(拍子合)昔(拍子合)ハ

源(拍子合)平(拍子合)左(拍子合)右(拍子合)と(拍子合)朝(拍子合)家(拍子合)を(拍子合)守(拍子合)護(拍子合)一(拍子合)奉(拍子合)り

代(拍子合)を(拍子合)法(拍子合)の(拍子合)國(拍子合)家(拍子合)を(拍子合)鎮(拍子合)め(拍子合)て(拍子合)萬(拍子合)機(拍子合)の

父(拍子合)ま(拍子合)あ(拍子合)ま(拍子合)り(拍子合)保(拍子合)元(拍子合)平(拍子合)治(拍子合)の(拍子合)世(拍子合)の(拍子合)乱(拍子合)。

地
定ニナク運ビテ

地
前ヲ受ケテ確リト運ビヨク

健ニ運ビヨク

い。あ。る。時。ら。来。り。け。ん。思。は。さ。り。
 り。ら。馬。の。駈。偏。は。時。郎。到。来。
 あり。程。は。嫡。子。悪。源。を。義。平。の。
 石。山。寺。の。籠。り。ち。多。勢。の。無。勢。通。
 を。ね。が。力。を。く。り。け。と。ら。れ。て。終。に。謀。せ。
 ら。れ。よ。け。り。三。男。兵。衛。の。佐。や。が。弥。平。
 兵。衛。が。手。は。渡。り。こ。し。も。都。へ。と。ら。れ。

頼む本

能く時
絵ひぬ
お切ミ

け。り。父。義。朝。は。こ。れ。より。も。野。回。の。内。海。
 よ。落。ち。行。き。長。田。や。頼。久。給。へ。も。頼。む。
 本。の。も。と。は。雨。漏。り。と。や。み。く。と。討。た。れ。
 絵。ひ。ぬ。い。ち。あ。れ。を。長。田。の。云。ひ。か。ひ。なく。
 て。は。君。や。が。討。ち。奉。る。と。や。い。ち。あ。れ。を。
 此。宿。の。あ。る。は。ま。さ。も。女。人。の。あ。ひ。び。く。
 し。く。も。頼。ま。れ。て。一。夜。の。情。の。み。ら。あ。り。

此地(確)に有様の(地)原平(確)兩家

の(確)旗(地上)の(確)白雲(位)紅葉(早ク)の(確)散り

あり(下)戦(カ)ふ(カ)運(カ)の(カ)極(カ)の(カ)悲(カ)一(カ)さ(カ)ん

大崩(オ)を(オ)朝長(オ)の(オ)膝(オ)の(オ)口(オ)を(オ)の(オ)ら(オ)あ(オ)ふ

射(オ)させ(オ)て(オ)馬(オ)の(オ)大(オ)腹(オ)を(オ)射(オ)つ(オ)け(オ)ら(オ)る(オ)ん(オ)だ(オ)

馬(オ)の(オ)頻(オ)に(オ)跳(オ)ね(オ)あ(オ)が(オ)れ(オ)ど(オ)も(オ)難(オ)儀(オ)の(オ)手(オ)あ(オ)れ(オ)ば(オ)

あり(下)だ(下)ん(下)と(下)ま(下)ぬ(下)も(下)難(下)儀(下)の(下)手(下)あ(下)れ(下)ば(下)

拍子扱
大山明
三モ

あり(下)だ(下)ん(下)と(下)ま(下)ぬ(下)も(下)難(下)儀(下)の(下)手(下)あ(下)れ(下)ば(下)

地拍子
一足も
(ヤ)三モ

地拍子
青墓(ヤ)三モ

地拍子
遠(遠)の(ト)モ

一足(ト)も(ト)あ(ト)り(ト)て(ト)は(ト)ち(ト)や(ト)葉(ト)替(ト)の(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)

の(ト)せ(ト)ら(ト)れ(ト)て(ト)は(ト)ち(ト)ま(ト)に(ト)は(ト)路(ト)を(ト)志(ト)の(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)

て(ト)此(ト)青(ト)墓(ト)の(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)手(ト)は(ト)雑(ト)兵(ト)の(ト)手(ト)は(ト)

懸(カ)らん(カ)ぶ(カ)り(カ)の(カ)思(カ)ひ(カ)定(カ)めて(カ)腹(カ)一(カ)文(カ)

字(ト)の(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)切(ト)つ(ト)て(ト)其(ト)ま(ト)の(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)修(ト)羅(ト)道(ト)の(ト)

遠(遠)の(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)青(ト)野(ト)の(ト)原(ト)の(ト)

あ(ト)ら(ト)る(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)あ(ト)ら(ト)る(ト)

ただひ終る

姨捨

解題

都の者、中秋月明の夜姨捨山に到りたるに、昔此山に捨てられし老女の亡霊現れしことを作れり。古名を姨捨山とも云ふ。又姨棄、伯母棄、伯母捨等の文字をも當つ。後世、世阿彌の作と傳ふれども世阿彌の申樂談儀に曲名を記さず。姨捨の事蹟は古今集雜の上に出でたる讀人知らずの歌「わが心慰めかねつ更級やをばすて山に照る月を見て」に生じたるものにて、後、大和物語に此歌に附會して一條の歌話を記せるが此話説の初見なり。其歌話には「信濃の國更級といふ所に住みし男、稚き時親に別れ、伯母を親の如くかききて若き頃より共に暮し居たるが、其妻此伯母をうるさしと思ひ、伯母の老いゆくに従ひて惡むこと甚しく終に夫に迫り伯母を捨てよと云ひて聞かず。男も其心になりて、月明なる一夜、寺に行くと偽り、伯母を負ひて高き山に行き、そこに捨て、歸りしが、さすがに多年の恩愛の情堪へ難く、夜一夜眠りもつかず、折から其山の上より明なる月のさし入るを見て、悲しさの餘り、彼のわが心慰めかねつ云々の歌を詠じ、夜の明ると共に再び迎へ來りて昔の如くかきつきたり。それよりして此山を姨捨山といふ」(意を取る)とあり。次いで俊賴無名抄には同じ説話を載せ、歌を老女が山に捨てられて悲しさの餘りに詠みしものとし、再び家に迎へ取られたる事は記さず。此二書の歌話はやがて口碑となりて様々に傳はり、後世「姨捨山」と歌に詠まれ文に作らるゝ事多く、謠曲にも亦取り入れられしものなり。されども最初の古今集の時に、既に作者も作の原因も不明なりしものなれば、それより遙に後世なる二書の歌話は「をばすて」山の詞に由りて附會したるものと見るべし。歌物語には此種の作物語多きものなり。

能之小書

弄月の舞 又弄月の傳、及び前後替といふ小書あり。

辭解

月の名

「秋」に「明」をかけ、名高き明月の時、近き意にて「秋」の語に續けたり。

姨捨山

信濃國更級郡に在り。されど其所在に就きては數説あり。今も同郡八幡

村の西に姨捨の地名あれど之は後人の傳説に假托せしものなるべく、田毎の月など、稱するは遙に後世のことなり。此曲の典故とも見るべき俊賴無名抄には更級山即ち冠山を稱したるものとすれども今の小谷郷鹽崎村な

る長谷寺山の異名小長谷(をほつせ)山の轉訛なりといふ説を採るべきか。月の名勝として多く歌に詠ま
れたれども、皆古今集の歌、大和物語、無名抄等の話柄を因として想像して詠じたるもののみなり。更級

の月 姨捨山の 旅居 旅に居る事。されど恐らくは「旅ね」の文 假枕 假そめに 中宿 途中の さこ

そと 大和物語の故事をさこ 面白からんずらん 面白くある 在所 姨を捨て 心えぬ 老女は

心「云々の歌にて問はれんを豫想し居たるに「姨捨の在所は」云々と露骨に尋ねられたる 我が心 古今集

より。「心得難し」といひたるなり。之を「心得たり」の意に解くは却つて心得ぬ事なり。桂 特に桂を擇びしは月に因

桂 特に桂を擇びしは月に因 埋れ草 捨てられたる人の遺跡が埋没し去りたるを、草を連鎖と 執心 着

する 秋の心 風までも身にしみく秋 縁も残り 松も桂も常緑樹 はや色づく 「秋の葉」に音

や」といへり。色づ 一重山 埴科郡屋代驛の南方地蔵峠をいふとの説あれど如何はし。此句又大瓶狸々にも出

は唯一隔の山といふ意にて山の名に非ず。こゝも此意なるべく、之 薄霧 一重といふより薄 雲つき 雲の

に紅葉の度の一重にて未だ濃厚ならざる意を含めたるなるべし。夜遊 夜、歌ひ 名にしおひたる 山の名とな

夕陰 夕暮の闇くなりたる物蔭。言ふに掛く。又待詠 いくくの秋も 何所に來りても秋に隔 三五

夜中 云 朗詠集に出でたる白樂天の詩句「三五夜中新月色、二千里外故人心」。三五夜中は八月十 明けば

又 新教撰集に出でたる定家の歌。第四句「傾く月の」とあるを「今宵の月の」とかへて引く。八月十五夜は

さなきだに さうでな 名を望月 類無しといふ名を持つを 見しだにも 云 此程限無きは曾て

ぬ程の秋の 堪へぬ 月の好きに心堪 昔もだにも 昔捨てられし夜の月とは思はず、 白衣の女

人 月宮に白衣の天女ありといふ傳 おぼつかた 確ならず 昔に歸る 昔を追憶して現 月の友

人 月を眺む まどる 一座に居 花に起き臥す 花の邊に起き臥して袖に露 色々 露の色々なる

掛 いつ馴れそめて 云 一つの間に親しくなりたる 盛りふけたる 云 花の盛りの疾くに過ぎたる

老女に見 草衣 前の女郎花を しばたれて 涙にて衣のじめく濡るゝを 面を更級 顔を人にか

よしや 云 氣を取り直し、夢の世と観じて 思ひ草 女郎花、露草、龍膽等の異名なりなごいへど古來審

の意 興にひかれて 云 晋の王子猷といふ人、月清く雪白き一夜、小舟に乗じ戴安道といへる友を訪は

來、興盡而反、何必見安道耶」と答へし 一輪満てる 云 堯山堂外記に出でたる一僧の詩句に「此夜一輪滿、

故事あり。月夜の縁にてこゝに引く。 團々 月のまご 海嶠 海邊の 諸佛の御誓ひ 三世十方の諸佛が衆生を濟度し

光 阿彌陀佛の誓願をいふ。無量壽經重誓の偈の中に「我建超 普き影 影の物を蔽ふが如く普遍なる

世願この句有り。他の諸佛に超え勝れたる本願なればなり。 彌陀

光 阿彌陀佛の誓願をいふ。無量壽經重誓の偈の中に「我建超 普き影 影の物を蔽ふが如く普遍なる

世願この句有り。他の諸佛に超え勝れたる本願なればなり。 彌陀

光 阿彌陀佛の誓願をいふ。無量壽經重誓の偈の中に「我建超 普き影 影の物を蔽ふが如く普遍なる

世願この句有り。他の諸佛に超え勝れたる本願なればなり。 彌陀

光 阿彌陀佛の誓願をいふ。無量壽經重誓の偈の中に「我建超 普き影 影の物を蔽ふが如く普遍なる

世願この句有り。他の諸佛に超え勝れたる本願なればなり。 彌陀

光明に云阿彌陀經に「彼佛光明無量照十方國、無所障礙、是故號阿彌陀」とあり。佛教にては光明は智を表象す。三光白虎通に「天有三光、日月星」とあり。其外諸書に見ゆ。西

に行く云三光の西へと傾き行くは、衆生をして西方淨土往生を願ふべく勸めん爲なりとの意。如來の右の脇士阿彌陀如來を本尊とし、觀音は左に、勢至は右に在りて輔佐する故に脇士といふ。觀經に「想一大勢至菩薩像坐右華座」とあり。月を大勢至となすことは次に記せり。有縁有縁の衆生にて、佛と何等かの因縁有る者。觀經に「有縁衆生皆悉得見」とあり。

重き罪五逆、十惡等の罪科。天上の力觀經に「令離三塗、得無上力」とあり。もと無上とありしなるを、無の同字なる无を用ひたりし爲天上と誤りたるものならんか。大勢

至前掲經文の次に「是故號此菩薩名大勢至」と見ゆ。月を勢至菩薩とする事は羽衣に「南無歸命月天子本地大勢至」ともあり。天地本起經に「阿彌陀佛遣應聲吉祥二菩薩爲日月、應聲是觀音、吉祥是勢至」とあるに據る。天冠の間に觀經に「此菩薩天冠有五百寶華、一々寶華有五百寶臺、一々臺中、十方諸佛、淨妙の淨玉珠樓、珠玉の如く美しき樓閣。以下淨土の有様を説く。系竹系は絃、竹は管、風の音が自ら系竹の調をなすの意。心引かる系竹の系の縁語を取りて引

蓮「ハチス」なるべきを「ハチ」といふ。諸へり。傳へ誤りしものか。寶の池淨土に八つの池ありて七寶より成り水中に蓮華咲くといふ佛説に據る。たつや並木波と掛く。並木は七重行樹とて、七寶の樹が七重に極樂を繞れる由阿彌陀經に見ゆ。芬芳芳しき。薰り。迦陵頻伽音聲の絶美を以て知らるゝ極樂の鳥。類へて摸

程の意。おのづから鳥の尾に掛く。無邊光大勢至菩薩の異名。觀經に「但見此菩薩大毛孔光即見十雲月盈缺に寄せて盛衰の理を説く。有爲轉變諸現象は無常にして轉變するといふ事。露の間草の縁語を借りていな

かく却つて。胡蝶の遊び高麗樂に胡蝶の舞といふ曲あり、胡蝶の花に戯るゝ状を摸して作る。此意にて茲に綴り、尙莊子が夢に胡蝶となり、彼我の別を辨へ得ざりしに

結び合袖を返す事に昔の願はず。返せや袖を返せと言ひ掛く。妄執の心迷妄して執著する心。閻浮世此世あさま朝になるといふを、明さまになる

装束附

- 前シテ (里女)
 - 面深井、鬘、無色盪帶、襟白二つ、着附摺箔、無色唐織、老女扇。
- 後シテ (老女)
 - 面姥、姥髮、鬘帶、白大口又は淺黃蒨黃にても、白地長絹、白地腰帶、老女扇。
- ワキ (男)
 - 着附段熨斗目、素袍上下、小刀、扇。

三重習
三番目

姨捨

八月

ワキテ 老女ノ靈(前ノ里女)
旅 僧(又ハ男)

早次第上 (位重ク流マズ)

ヨウク (拍子合)

目ハの名チあキ秋もれや目ハの名チあキ
秋もれや姨捨山を尋ねんら 弟(落著)
者ハ都方よほまひ仕ら者もてらわれ

見ぎの程よシ

未だ更級の目や見ぎの程よ此秋思ひ

たも姨捨山へと急ぎの道行上(兼カニ滞リナ)此程の暫

旅居の假枕暫旅居の假枕又立ち

出づる中宿の明か暮しと行く程よ
(前3行連発)
 こゝろあよあよ更級や姨捨よ暮まよ
(シラ)
 けり姨捨よあまのつら
(心静ニ大切ニ)
 姨捨よ来て見むが嶺平らり
(ハ)
 萬里の空も隔あへ千里の畏もあは
(ハ)
 の夜かみかみ思ひをいふまじ
 此處よはらへ今宵の月を眺めざやと

(大キク)
 思ひの呼掛のシテあはる旅人の何事
コキ
 を仰せらぞ
(素直ニ波マズ)
 いが。始めて此處よ暮りては。かやく
オシ
 身シのシらくよ信む人ぞ
シテ
 級シの里よ信む者まで。あはる名よあよ
 秋のあつた。暮らして急ぐ日の名。殊よ
 照る深き天の原隈あま四方の気色

慰めあねら更級や。慰めあねら更級や。
 積捨山の暮も。おも桂もまの木の。
 緑も残りて秋の葉のはや色づくが。
 一重山薄霧も立ち渡り風凩く雲。
 つまや寂まのの氣色あな寂ま。
 山の氣色あな。旅人らづらひ。
 来り給よぞ。 （半）（兼道・定マズ）

都の者もてら。更級の目や影つ及び。
 始めて此處よ来りてらよ。 （半）（兼道） 借ハ都の
 人よもままも。おもらむらむらむ。
 目と共の現れ出で。旅人の夜露や慰め。
 め申まづ。 （半）（角五タラヤウ） 夜露や慰めこと。
 片身はらあひ。 （半）（兼道） 片身はらあひ。
 更級の者。 （半）（兼道） 更級の者。

シテ (淋シクカハツテ) 女 持
 任みおとさきん此山の都のあひ
 たる 姨捨の (地上秋 閨雅ニ淋シク) 恥
 ぢや。そつとさきんも恥ぢや。其古
 へも捨てらして。唯ひとり此よまむ
 月の名の秋毎の執心の闇を晴らさ
 んと。今宵思ひ出でたつもの蔭の
 本のみもあつた道おやまのまむらり

(シシメア)

早秋 (殊勝ニ滞リナク)

待詠 (拙子合)

早秋 (殊勝ニ滞リナク) 待詠 (拙子合)
 夕蔭過ぐる月影の蔭過ぐる月
 影の。はや出でそめて面白や萬里の
 室も隈なく。づくの秋も隔なき。
 心も澄みてよもまがら五夜中の新
 月の色を千里の外の人のごころ
 後シテ (位静ニ品ヨク) 一声 (拙子合)
 おら面白のちうからやあ。あら面白の

上(氣ヲカテ静ニムツクリ)

ちうがらや。明けも又秋のあつても過
 きぬべ。今宵の日の惜みのみかた。
 さあまたな秋待ちあねて類あまき名を
 望目の見一だも。響えぬほらよ
 隈もあま姨捨の秋の目。あまうよ
 堪ぬいんや。昔もだも思たぬそや
 不思議あまは。更ら思ひの日の夜よ。

口手かん上

(健ニサナリ)

白衣の女。現れ給よ。夢の現れおほ
 つあき。薬のつらさや。暮る現れ

シテ和(静ニ押ナシ)

出で。老の姿。恥ぢあつたり
 何やうつ女給よ。さるも。あつた
 捨の山。老女が。いふ處の
 清の秋の夜の。目の友人まゝあして
 草や敷き。花よ。起き。胸も袖の露の

星

(健ニサナリ)

シテ和(静ニサナリ)

早

早

(シツカリ)

シテ和(静ニ)

静

口

三ノ位ニ合セテムツクリト
女捨

さも色この夜遊の人よいらつ駈れそ
めてうらあや地上秋盛健三流ふけたる女郎
花の盛打切ふけたる女郎花の草衣志原
たれて昔奇ニだよ捨てられ程の身を知
らで又姨捨ヲの山よ出でて面ヲを更ニ級ノの
目よ見ゆるも恥ヲやハおハや何事ヲも
夢の世のあらくさハる思ハたハりトや

打掛
クリ上
(袖子不念)

思草花よめで目よそみて遊ハせん
げハも興ハよいらつて来り興ハつきて歸ハり
しも今のちらハかと知られたる今宵の
室の氣色ハあまハ然ハるハ月ハの名所ハ
らぐらあねハ更ハ級ハや姨捨山ハの曇ハ
あま一輪満ハてる清ハ光ハの影ハ團ハとして
海ハ嶺ハを離ハるハ然ハるハ諸佛ハのハ声ハを

夷舎

七

地 (前二度シ運ビテ)

わかれ勝方あけぬとも起世の悲願
あまねき景殊陀光明よ志くふあ
さる程よ。ニ度西よ行くらる衆生を
して西方よ勧め入れんが為とあり目
彼の如來の右の脇士として有縁を
殊よ首すき重き罪を軽くせんすとの
かを得る故よ大執事といふもあ
●獨吟
(拍子合)

(前ヨリ運ビテ)

天冠の向よ花の史かやまの臺の
かぎくよ他方の浄土を現き玉珠
樓の風の音糸竹の調りくよ心
ある方もあり蓮色よ羨れまある
寶の池のほとりよたつや並木の
花散りて芬芳志まらぬおれたり
加陵頻伽のたぐひあり
夷舎

三上 (品好ク引立)

地 (前ヨリ運ビテ)

拍子板
鴉子の

拍子板
をけれ
バサ

たぐへてもろもろ。し雀鴉子の。
 同く轉の鳥のおのづから。光も影も
 おあて。まらぬ隈もあひれが無邊
 光とら名づけたり。然れども雲月の
 ある時の影満ち。又或時の影缺くる。
 有為轉の世の中の空のまきを
 未きあり。昔恋もき夜遊のそで

女捨

男上 (閑雅ニ引立テ)

序之舞

地上 (品時ク乗ッテ)

(拍子合ハ)

打上 頭ニ付

中 (閑雅ニ流ス)

我がころろ。慰めかねつ。さらあや
 懐捨山は照る月を見て照る月を見て
 月も馬に花は戯る。秋草の露の
 向は露の向は。ありく何れも現
 れて。胡蝶のあそび。戯る舞の袖
 返せや返せ。昔の秋を思ひ出で
 たる妄執のや。方もあま。今宵の

地上 (ムツクリ)

地上 (長閑ニ調子ヲ押シテ)

地上 (シトヤカニ)

地上 (押テ品好ク)

夷舎

七

志のやうきハ固
浮のハノリヲ外
スモ拍子ハ合心ニ
本地一句ノ含ミヲ
要ス

習ヒノ(間)アリ
ヤラハノ寸法ヲ取
リテシテ諺ト出ス

杖風身よ志みぐと恋きる昔
志のやうきハ固
浮のハノリヲ外
スモ拍子ハ合心ニ
本地一句ノ含ミヲ
要ス
居れ夜も既よまらくとはやあさま
ももありぬれぬれも見えぬも
帰るあさま(間)いとう捨てられて老
地上(前ヲ受ケテ淋シク)イコトイチ
女(昔こそあらめ今も又姨捨山
とぞありよける姨捨山とありよけり

柏崎

解題 柏崎殿の妻、夫の死し愛兒の遁世せし歎きに、狂氣して善光寺に迷ひ行きしが、其如来堂にて適々愛兒に邂逅したる事を作る。狂亂ものの中にても稍後作なるべし。申樂談儀に「うかひ柏崎などは忍なみ(極並)の左衛門五郎作也。さりながら何れも悪きところを除き、よきことを入れられければ皆世子の作成べし。柏崎には土車(能)の曲舞をいれらる」と見ゆ。栗田口勸進申樂所演。

能之小書

笹留(笹)の拍子ともいふ)及び大返といふ小書あり。

謠ひ方梗概

前は哀傷、後は真の狂女にして心持緩急變化等多ければ能く文味を會得して謠はざるべからず。

シテ 前段はおしなべてしつとりと寂しく悲痛の心持有るべし。出の「なに小太郎とは」云々は、調子餘り高かふが宜し。「此程は」よりクドキの調子にて濕やかに謠ひ、氣はかゝれど運びはつけず。ロンギは稍下に取りて寂しがるべく、「げにや歎きても」云々は形見を見る心にて悄然とあるべし。「さても」以下文はロンギよりも聊か引き立て、さらりめに謠ふうちにもしつとりとしたる味はひ有るべし。後は狂亂して郷里を出づるものなれば、前と全然其扱ひ、心持を異にす。「これなるわらんべどもは」云々は氣をかけて確りと出、句毎に多少の緩急を持ちて「子の行くへをも白糸の」と一聲の調子にて抜けぬやう謠ふべし。サシは氣を更へてさらりと謠ふ。ワキとの問答の中、「教へはもとより」以下氣かゝりて段々はすみ行き、「聲こそ」云々と氣を乗せて確りと謠ひ地へ渡す。「いかに申候」は少しく狂氣の覺めたる心にて稍靜に謠ひ出し、「あらいとほしや」より再び狂はしき心にて調子を聊か上にとり、かゝりめに謠ふが宜し。「九品蓮臺の」は少しく確りと、次のサシ以下はやゝ靜にあるべし。クセの初の上端は確りと謠ひ、後なるはさらりと扱ふ。ロンギは親子再會の喜なれば調子晴れやかに喜に満ちて謠ふが宜し。

ワキ

素袍男物なれば、重くれぬやうハキ／＼とあるべし。次第以下凡て此心にて謠ふ。シテとの問答は慎しやかなるべく、ロンギは清經の形見を渡す處に類する心持にて、シテよりも運びて承け渡す。ワキヅレ

は粗雑にならぬを程にて軽く扱ふ。

地 「昔語りに」云々は極めてしつとりと謠ふ。「亡からん父が」云々も靜に、「父が別れは」以下さして低めず、さらりと謠ひて、好く緩急に心しシテの憂き心中を表はすべし、後はシテの諸と相俟ちて好く狂女物の趣有るべし。「亂れ心や狂ふらん」の一句氣をかけてさらりと受く。「憂き身は」はや、靜めて確りと出、「越後の國府」以下すらりと運びて調子好く謠ふ。「頼もしやく」は氣を起して稍高く「彌陀は導く」はすかりと受けて引き立て、謠ふ。クリは高めにさらりと扱ひ、サシはシテの調子を承け、クセは餘り位を靜めず、聊か氣を乗せて謠ふが宜し。ロンギ以下は喜を旨として調子好く、さらりと謠ひ納むべし、「園原や」は「ソノワラ」と謠はす「ソノハラ」と謠ふ。

注意すべき謠ひ方

後段クリの後「異香満ち満ちて」の一節は少しく運びを緩め乗つて謠ふ他に例少し。

辭解

夢路も添ひて 云永き旅路に夢心地の日數を重ねて今故郷に歸り來りたることは現實なりとの意。**柏崎殿** 柏崎は越後刈羽郡に在り。柏崎殿はその領主

雪の下 鎌倉、鶴ヶ岡の南の地。**一通り降る** 道を通ると村時雨の通るに掛く**山の内** 鎌倉の山北附近、今は小坂村の大字。村雨の「やま」すを山の内の地名に掛

袖ささえまさる 次第に北國に近づくに隨ひて濡れし袖のいよく冷えて寒く感ずるをいふ。**碓氷の峠** 前の「さえ」を承けて「旅衣」の薄きと地名の碓氷とを通はせ、鎌倉より早や信濃國に入れるを示す

心もとなや 氣づかはしや**遁世** 世俗の交を避けて佛門に入ること。そなたの風 鎌倉の方位より吹かしかりいたはり**病命つれなく** 新千載集に「をしからぬ命つれなく存へば尙もうき身の果や知られむ」無からん父 亡くなりし父。

善光寺 長野市に在り。皇極天皇の勅命によりて本田善光創建せり。今は天台淨土の兩宗に兼屬す。いづくとも知らず 何處よりともなく**如來堂** 本尊

來を安置せる殿堂、即ち本堂。善光寺の本尊は中央阿彌陀如來、左右觀音勢至の一光三尊佛なり。昔印度の月蓋長者閻浮檀金を以て造りしものといひ傳ふ。印度より支那、百濟を経て欽明天皇の時我國に渡來し、蘇我物部兩氏の紛争を醸せし歴史上著明なる佛像なり。これなる童べ共は 類句蟬丸に有り。惟ふに蟬丸の句を借りたるか。うたてやな 情無き心

あらん人 同情心ある人ならば他人の不幸をみては訪ひ慰めもし給ふべきに。つま 夫をさし行くへをも 行方を「知らぬ」を以て亂れ心に續く。此句三井寺にも出づ。あだ 頼み難く徒なること。こゝ 思には死なれざりけり 恐らくは三井寺より借りたるならん。あだに引きたる原歌不明なり。こゝ、思には死なれざりけり 早く死なんと思へども物思ひの爲に死なんことは中々難しとなり。原歌は不明なれど。檜の葉 憂き身は何

の柏の葉にかけ、次 **國府** 往昔官衙を置かれし國々の中心都會、國府又は府中ともいへり。越後の國府は其舊址の柏を呼び起す。不詳なれども、和名抄には「在頸城郡」とあり。今の中頸城郡直江津の南方、國分寺なるべし。いつまで草 「いつまで」の序辭。堀川百首に「壁におふるいつ麻衣 親の狂ひ歩くを知ら

裏の意を借りて浦に續く。**常磐の里** 常磐は信濃水内郡飯山町の北の地。今の常磐村。木島は同じく飯井上は上高井郡、今の井上村。いづれも **桐の花さく井の上** 寶篋の詩に「鳥鳴争飛井上桐」とあるに據れるか。**生身** 畫又

などに非 **極重惡人** 慧心僧部の往生要集に出づ。最極の惡人たる末世の衆生は成佛すべき他の方法手段ざる本體 **唯心の淨土** 唯心淨土は自己の心中にあるものと聞けば我が居る此堂の内陣は極樂の蓮臺なるとの意。唯心の淨土 唯心淨土は自己の心中にあるものと聞けば我が居る此堂の内陣は極樂の蓮臺なるとの意。

九品上生の臺 九品は極樂に生れたるもの、果報の階級なり。上中下の三品に各上中下の三生ありて九品となる。九品上生は九品の上品上生の意にて最上等の位地なり。通用語としては上品上生

装束附

前シテ (花若の母)

面深井、鬘、鬘帶、襟白又は白二つ、着附摺箔、無色唐織着流。

後シテ (花若の母、狂女)

面深井、鬘、無色鬘帶、襟白又は白二つ、着附摺箔、水衣淺黃萌黃花色の類、腰巻無色縫箔、縫入腰帶、狂女扇、篋。物着、前折烏帽子、長絹。

ワキ (小太郎)

着附段熨斗目、白大口、掛素袍、縫紋腰帶、小刀、守(掛く)、笠(冠る)、扇、文(懷中)。

子方 (花若、僧)

角帽子、着附無地熨斗目、水衣、緞子腰帶、墨繪扇、珠數。

ワキツレ (善光寺住僧)

同上。

四番目
畧三番目

柏崎

十月

子方花若(註ナシ)
ワキツレ小太郎(後、物狂)

早次第上(シラホリト)

ヨワク
(抽子色)

夢路も添ひて吉里よ。夢路も添ひて吉里よ。清もや現あらん。こゝれ越

後の國柏崎殿の境内よ。小太郎と申せ

(氣ラカテ 慎マシヤカニ)

者よてい。さても頼み奉りし人の訴訟

の事いひて。在鎌倉よて居座いひて。

唯かりそめよ風のこちと傳せらひて。

者よてい
トモ

柏崎

程なく堂へあり給ひてゐる。又吉子息
 花若殿も同じく在鎌倉まで居座とい
 一。又吉の形別を歎き給ひてゐるも
 おく吉道せよとて。さる間花若殿の所
 文子。形見の品ごとを取り送へ。唯今
 古里柏崎へと急ぎの(大キク)
 日影も袖やぬらまらし。日影も袖や
道行上 (温ヤカニ運ビヨク)
(拍子合) 乾ぬるまらし。

又ハ
雲の下。通る

ぬらまらし。今行く道の雲の下。一通り
 降る村時雨。山の内やも過ぎ行けば。袖
 涙増る旅衣。碓氷の峠打ち過ぎて。
 越後よ早く著きよはけり。越後よ早く
 急ぎの程よ。古里柏崎よ
句 (氣ヲカヘ落著ヨク)

著きよはけり。まづ一葉内を申せよ。いよ
(氣ヲカヘテ素直ニ)
 ころ。いよの申る鎌倉より小太郎が来

こころそびしく申さく シテ(静ニ確リ) あよぶを郎

もも一殿の志清のあつた (角立タメヤウニカハツテ) あらび

一や何んぞおもむく申さぬぞ ワキ(使マシヤカニ) かしら

ひしおがしる 中(神ハテスラリテ) 申し申し

くわ クワス 思ひも (神子不念) 辨くわ

あ ハト 言 モト 物 モト 申 モト ね モト へ

泣 (角立タメヤウニカハツテ) 花若 カタ 方 カタ 事 カタ あり

ワキ(素直ニ)

かしら シテ(音ヨリシツカリ) 花若殿 ゴトシヤイ の志清 シツカリ 申 シツカリ する

何 シカ の花若 シカ が シカ 申 シカ した シカ 事 シカ なる シカ 申 シカ する シカ ぞ

り シカ 申 シカ する シカ 事 シカ なる シカ 申 シカ する シカ ぞ

見 シカ の物 シカ 持 シカ ち シカ 申 シカ する シカ 事 シカ なる シカ 申 シカ する シカ ぞ

形 シカ 見 シカ なる シカ 事 シカ なる シカ 申 シカ する シカ 事 シカ なる シカ 申 シカ する シカ ぞ

た シカ 事 シカ なる シカ 申 シカ する シカ 事 シカ なる シカ 申 シカ する シカ ぞ

た シカ 事 シカ なる シカ 申 シカ する シカ 事 シカ なる シカ 申 シカ する シカ ぞ

地 (カヘテ静ニ)

桐山

形見を思ひて涙ぐまきいさげにわかれぬが

半句 (素直ニ確リ)

花若殿の形見の形見を思ひて涙ぐまきいさげに

三テ上

(引ニテテシツト)

(拍子不合)

さてもく父前痛むらあせ給ひ

程なく言ひあり給ひだ。心の中の

悲しき思ひやあせ給ひあせ給ひ

帰つて馬有様見集らせたはるるも

思ひまらぬ修行の道もあせ給ひあせ給ひ

●小謡

上歌

父が別れあせ給ひあせ給ひ

名残もし子程の形見あせ給ひあせ給ひ

たる父の恨みやあせ給ひあせ給ひ

よそ書いあせ給ひあせ給ひ

うちあせ給ひあせ給ひ

出づるあせ給ひあせ給ひ

わ申さし思ひあせ給ひあせ給ひ

柏崎

切

切

地下歌 (中)

(カヘテ)

(拍子合)

(シツメル)

(カヘテ、シツカリ)

悲ニ又ク修行ニ出づる身ノの事も亦は甚か
 である母ノ姿や女をえしこと思ひ心の
 ありらん恨めの我が子や夏まさ
（氣ヲカケ、スラリト運ビテ）
 時ハ恨みあらもなつもてハ我が子ノ
 行くへ安穩の守らせ給へ神佛と祈る
（修シ）
 心ぞ哀ある祈ひ心ぞ哀ある心ぞ哀ある
（氣ヲカケ、スラリト運ビテ）
 中入

早ツ行（殊勝ニスラリ）

あやまらし者ハ信濃の國事はままの

信僧も心をなしてはあならず入らんぞいへ
 とも知らまい思僧を頼む由作せる程よ
 師弟の契約をあらはし程出家をせ申
 しては心を向毎日如來堂へ伴ひ申はし
（大キク）
 けなもいまも思ひ心をなしてはあならず
（諺掛）
 あらしころもいまも何もなしてはあならず
（順次ニ氣合カリテ）
 狂やまらし者ハ早くもあらはし程出家をせ申はし

人。訪^{トム}びてこそ繪^カびけり。そしちやん

いさよまよ^ツまよ^ムり死して別れ唯ひとり

忘れ^(大キク)わたなめも思^シひ^キの行く

ちも白糸の^地 乱れ^(氣ヲカテサリ)ばやねらん

けよ人の身のあだありけりと誰^{カケリ}

きびり^{シテ丹}ん^上虚言^{カケリ}や。又思^打ひ^上死あわたり

けりも詠^{カケリ}みも理^打や。今身のよは知ら

●獨吟仕舞

れた^トり。さもひも^中はま^ツま^マの^トおと^ト思

へ^カ恨^テめ^カや^カ夏^カき^テ身^カの^シ何^シと^シ播^ナの

葉^イの^コ柏^ト崎^トち^トね^トひ^ト出^トで^上越^上後^秋の

國^カ府^カは^カ著^カき^カか^カ越^カ後^カの^打國^カ府^カよ^カつ^カき

一^カか^カ人^カ目^カも^カ分^カり^カぬ^カ我^カが^カ姿^カら^カつ^カま^カで

草^カの^カら^カつ^カま^カで^カも^カ知^カら^カぬ^カ心^カの^カ麻^カ衣^カう^カら

遠^カく^カ行^カく^カ程^カは^カ松^カ風^カ遠^カく^カ寂^カし^カき^カら

白奇

隙もあらまものちと詠女も思ひ
 知られたる。これや如來の集らせてまの
 後生善所なるも祈らざやと思ひ
 物著 あらいとほや此鳥帽子直垂のま
 万何事よりまも圍からま。うらハ三物
 とやらんや射とらへ教陣敷の道も
 達者ありと。又酒宴あつたつかり。

物著

行(再び狂心ニ氣ヲカケテ)

乱舞まうて
見せんとてトモ

中 健滞リナク
 中 鏡直垂より出だ。衣紋うらくく著
 中 ありて。ぬり取つて打ちあづき。手拍子
 人子雜させ。扇お取り。鳴る瀧の水
 地クリ上 引三テ大キク
 引レ下念稱名の聲のうちよ。攝取の
 光明を待ち。聖衆來迎の雲の上よハ
 九品蓮臺の花散りて。果香満ち

地上 (調子ヨク奏ツテ)
 打(ヤラ) 果香満ち

●獨吟サシクセ
雜子サシヨリ切迄

満ちて人よ黄^(ギ)下。白虹地^(ハツコ)も満ちて^(拍子外ス)
 れり^(拍子不合)うら^(打)く世^(ミテ)向^(サシ)の幻^(ミヤ)相^(サシ)や觀^(ミ)を
 る。飛花^(トビ)落葉^(ラク)の風^(カゼ)の前^(マエ)より有^(ア)為^(ト)の
 轉^(マ)変^(カ)や悟^(ト)り。電^(ヒ)光^(ク)石^(イ)火^(カ)の影^(カゲ)のうら
 り。死^(シ)の素^(ソ)業^(ゴ)を自^(ジ)心^(シン)の^(ノ)あめ^(ノ)て驚^(オドロ)く
 ち^(チ)あら^(ラ)ら^(ラ)な^(ナ)も。夢^(ユメ)中^(ノ)の葉^(ハ)の纏^(ツ)れ
 り。假^(カ)の親^(カ)子^(コ)の今^(イマ)も^(モ)な^(ナ)ほ。ほ^(ホ)く思^(オモ)て^(テ)も

●仕舞

世^(セ)の首^(ウタ)さきの露^(ツルシ)の憂^(ウレ)を身^(ミ)の置^(オキ)き所^(トコロ)
 誰^(タレ)の向^(ムカ)ひあり。旅^(リョ)の道^(ミチ)。こ^(コ)れも憂^(ウレ)さ
 せの^(ノ)あら^(ラ)ひあ^(ハ)や。悲^(カミ)女^(メ)の涙^(ナミダ)眼^(メ)も遮^(セ)り
 思^(オモ)の煙^(ケ)胸^(ムネ)も満^(ミ)つ。う^(ウ)ら^(ラ)く^(ク)こ^(コ)れ^(レ)を案^(ア)案^(ア)を
 る。三^(ミ)界^(カイ)の流^(リウ)轉^(テン)して猶^(ナホ)人^(ヒト)向^(ムカ)の長^(ナガ)執^(シツ)の
 晴^(ハ)れ難^(ガタ)き雲^(クモ)の端^(ハ)の目^(メ)の影^(カゲ)や明^(アキラ)けき。
 眞^(マコト)如^(ニホシ)平等^(ビョウトウ)の書^(カキ)巻^(マキ)のま^(マ)ら^(ラ)ん^(ン)と^(ト)な^(ナ)も

歎きもして煩悩の伴は結ばほめぬぞ
 悲き罪障の山高くは生死の海深し
 いまもてら此生よ此身や浮めんと
 げは歎けども人向の身三口四意三の
 十の道多かりき （前ヨリ連テ） されば法の法はも
 三界一心あり心外無別法心佛及衆
 生と聞く時は是二三無差別も疑の

あるべきや。さびの鉢陀如来唯心の淨土
 ありて。尊の心からきて此寺の池の
 蓮のさき事をあざら知らざらん。唯願
 をく影頼む。聲や力の助け船。黄金の
 岸よまるとべ。そもく樂みや極むある。
 教あまたよ生れ行く。道様どの品あれや。
 寶の池の水。功德池の濱の眞砂。數々

地抽子
十方の
ニモ

の玉の原^{トコ}も品^{モノ}どの樂^{タカラ}み^ミを極^{タガ}め^{ハカ}量^{ハカ}
 り^サあ^ハま^シ命^ノ佛^ハあ^ルべ^シや^ハ若^ク我^ガ成^ル佛^ト十^ニ
 方^ノの^セ界^ニあ^ルべ^シ一^ニ本^ノ願^ヲ誤^ラり^給ま^スら^ズ
 今^ノの^おれ^ら願^ヲし^キま^スの^行く^を白^ク
 雲^ノの^たも^びく^や西^ノの^空の^彼の^國に^下
 迎^へつ^つ淨^土の^縁を^あり^給ま^スら^ズ
 給^べし^と稱^名も^鐘の^音も^曉あ^けて

燈^ト火^ノの^善き^光ぞ^も作^ルあ^りや^南無^レ
 歸^ス命^ヲ蘇^ス院^ニ尊^ニ願^ヲあ^り給^ます^や今^ノ
 何^レや^らつ^つむ^くた^らし^き子^花若^クと^シ
 今^ノも^もさ^さむ^く涙^カあ^りや^我ら^子ぞ^と
 聞^けば^あま^りに^甚か^める^夢み^たと^{あり}
 思^ひ子^ノの^いづ^れぞ^も不^思議^ヤあ^り
 共^ニそ^しつ^つ思^ひく^らも^信の^海に^漂の^の

白奇

十三

見一もあらぬ面忘れ地(調子ヨク受渡シ)母の姿も

見一もあらぬ面忘れ地(晴ヤカニ淀ミナク)衰へとしひ

互におきりてありながらよく見れば

園原や伏屋よまある常木のありとも

見えては峰をぬきて聞き一ものち

今はや疑もなき其母や子よ峰よこそ

嬉しかりけり逢ふこそ嬉しかりけれ

地拍子
七二二一
園原や
三三

阿 漕

解題 古く阿漕、阿古貴、阿古木の字を當てたるものあり。殺生禁断の所に網を引きたる科により海に沈められし海人阿漕といふもの亡霊、地獄の苦患を語る事を作れり。六帖に出でたる阿漕の島の歌が種々傳へ誤らるゝと共に生じたる巷談を基としたる作なり、後世の書に世阿彌の作とあれども世阿の申樂談儀の作曲を擧げたる中に無し。諸諸流名寄に「金剛は阿古木」とあり。

謠ひ方便概 前段の趣は鶴飼に似たれどもそれよりは節も細かく位も聊か重し。後段は善知鳥に似通ひ、節の細かさは大差無けれども位はそれよりも聊か輕めに扱ふ。

シテ 賤しき海人、ことには禁断の所に殺生をする悪人なれば、溢みを本とし抑へて寂しく謠ふべし。聲づか心ばえなり。サシは少しさらり心。ワキとの問答惣じて思深かるべし。語は前段中の謠ひ所、句々の緩急心持に心を置くべし。中音クドキになりて「受くるや」云々は確りと聲に心持して感慨深く地に渡す。ロンギは氣を更へ、地を受けて少し引き立つる心。一句二句少し寄せる心にて、「すはや手繰りの」とすかりと氣をかけて出で弛み無く地に渡す。後は妄執去り難き漁人の重ねて現世の姿を顯はし、地獄の苦患を訴ふる心なれば大體の心得は前シテに同じきも一層情趣の痛切なるやう凄みを本と謠ふべし。さりとして強て聲を作るは宜しからず。出の一節剛柔の節の變化多ければ能く謠ひ慣れて滞ること無かるべし。「今宵は」云々の上音よりは氣を張り心持を更へて引き立て、謠ふ。詞も確りと弛み無く、「道をかへ」以下それれ心持あり。イロへの後「伊勢の海」云々は一聲の調子にて大きかるべく、「思ふも怨めし」はや、静めて扱ふ。

ワキ 能にては僧ワキ又は男ワキなれども素謠には僧ワキの心持にて宜し。次第は静に大きく、名告詞、著せリフ等常の通り、道行、待謠は穩かに謠ひ、シテとの問答、掛合等はシテを助けて事々しからざるべし。

地 初の地「物の名も」の上歌は静に引きしめて大きく謠ふ。語の後は「娑婆にても」と調子を更へて受け、クセは初を序の心、「錦木の」より破、「忍び妻」より急の心を聊か謠ひ分くべし。ロンギは氣を變へ、靜なる中にも引き立て、謠ひ出す。「網の綱」はシテを受けて出、以下緩急の謠ひ所肝要なり。「俄かに」より氣をかけて位進み、「疾風ふき」とかゝつて謠ひ、以下充分氣を乗せて運び、「こはそもいかに」と氣をかけて「聲」の廻

しにて位を静め、以下全く趣を更へ、しつとりと謠ひ納む。後は「唯罪をのみ」の一節強く乗つて謠ひ、「丑みつ」の上歌にて氣を更へ、節は弱なれど強めに心を置きて上調子にならぬやう扱ふ。「思ふも怨めし」はシテをを受けて出、次第に氣を乗せ、それぐの緩急を味はひて謠ふべし。此キリ心持多し能く稽古を要す。

辭解

心くづしの秋 古今集に「木の間よりもりくる月の影見れば心くづしの秋は來にけり」とあるを借る。「心くづし」に筑紫の意を兼ねたり。「月ぞ少き」とは未だ落葉多からざる

日向の國の字を引延べて九州より東方に向ひて船出するを述ぶ 八重の潮路 遠き海路 淡路瀉 波の泡の音を借る

日に向ふ 日向の國の字を引延べて九州より東方に向ひて船出するを述ぶ 八重の潮路 遠き海路 淡路瀉 波の泡の音を借る

ひ掛け、金葉集に「淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜ねがめぬ須磨の關守」とあるを引きて文 阿漕が浦 勢の綾とす。須磨の關は歌に多く詠まれたれば世に關の戸と云ひ續け、明け暮れの序とせり。阿漕が浦 勢

國津市東方の海濱一帯の稱なり。されども此名は古典に所見無く、唯和歌に基く巷説によりて生じたるもの如し。古今六帖に鯛といふ題にて「逢ふことをあこぎがしまに引く鯛のたび重らば人もしりなん」(夫木抄には「逢ふことも人しりぬべき」といふ歌を載せたるが、後世漸次誤り誤りて、「逢ふ事も阿漕が浦に引く網も度重

なれば人やしりなん」一本あらはれやせん」とし、更に「あこぎ」と伊勢の郡名安濃とを結びつけて、伊勢安濃郡の浦を阿漕が浦といふに到りしものなるが如し。かくて同郡岩田川の河口贊崎の附近は太神宮御膳の魚類を漁りし處にて一般の漁事を禁せられ居たる口碑により、此に彼の歌を解するに阿漕が浦に禁を破りて網を引く

者の顯るゝが如く密に逢ふ男女の間も顯れ易しといふ意にとることとなり、再轉して此曲に作られたるが如き逸話を生み、後阿古本草紙といへる物語さへ生ずるに到りしものなり。此等に基きて後世遺跡と稱するものをさへ生じたれど皆後人の假託なり。原歌は逢ふ事に憬るゝ意にてあこぎが島と云ひ、鯛の音を重ねて度重ると云ひ續けたるのみにて、此曲に作られたるが如き事蹟に關係なきのみならず、其「あこぎ」も島にして浦にあら

ず、固より伊勢の地名たる據も無きものなり。亦其所在も何所なるか全く明ならず、歌枕名寄には此歌より轉じたりと思しき「鹽木つむ阿漕が浦に寄る波の度重らば人もこそ知れ」といふ歌あれどこれも波の打ち寄する様によりて度重ると續けたれば相俟ちて此物語が後世の附會説なることを知るを得べし。波ならて 海士の衣の波に乾

及びその地名を伊勢に結びたるも後世の事なることを知るを得べし。波ならて 海士の衣の波に乾す隙無きは常なれ

ど、これは罪業を悔ゆる涙に乾す暇無き身 身の秋 身の秋とは悲しく物哀に吾身を思ひなして云へる詞なれば「波ならて乾す隙もなき」といへり。其悲しさの何時とも限らず、絶間なきを歎き

云へる 田夫 殺生 一なれば「かくあさましき」といへり。浮世の業 渡世の 尉 翁 伊勢の 海 源平盛衰記に出でたる歌(末句人も 六帖 古今六帖ともいふ類題歌集。六冊の歌帖なりしかばかく云

めし集とも 伊勢を 無し。古歌に例多し。見る目も輕き みるめは海藻の名。其藻を刈るといふ音を借りて輕々しく見ゆる由に云ひなせり。

海人のたく藻 新編古今集に「更けにけり海 物の名も 勢陽雜記に此連歌を出せり。前句「草の名も

勢の濱萩」此の 藻鹽やく烟も 續後拾遺集に「鹽竈の浦の烟は絶えに 敷島 歌道をいふ。海士なれども

の意。海士といひ鳥といひ寄り來る うるくづ 類 魚すなごり 業 阿漕といふ海人 此事勢陽雜

といひ人並(波)といふ、皆縁語なり。 苦みの海 佛教にて生死苦惱の極 冥途 死後の魂の 行

れども謠曲以後のものなるべし。阿漕を海人 苦みの海 佛教にて生死苦惱の極 冥途 死後の魂の 行

の 名としたるは惟ふに作者の創意ならん。 婆 世 阿漕が恨めしや 浦の音を恨

忍び逢ひたる男女 錦木の 陸奥にて戀する男、錦木といふ木を女の門に立て、文に代へたる風習ありと

此事は錦木に作られて 憲清 西行法師の俗名なり。法師始め佐藤兵衛憲清(又義清に作る)といひて鳥羽上皇

別に一曲をなせり。 承る。申すも恐れある上臈女房を思ひかけ進らせたりけるを「阿漕の浦ぞ」と云ふ仰せを蒙りて思ひきり(中略)

無爲の道にぞ入りにける。あこぎは歌の心なり」と記して前掲阿漕が浦の歌を載せ、「彼の阿漕の浦には神の誓

承る。申すも恐れある上臈女房を思ひかけ進らせたりけるを「阿漕の浦ぞ」と云ふ仰せを蒙りて思ひきり(中略)

無爲の道にぞ入りにける。あこぎは歌の心なり」と記して前掲阿漕が浦の歌を載せ、「彼の阿漕の浦には神の誓

にて年に一度の外は網を引かず **執心** 執著の心 **値遇** 逢ふ **一樹の宿** 一樹の蔭に宿り一河の流を汲むも
とかや。云々とあるを引く。

うらぶれ 浦の音を借りていひ、裏の縁に **墨衣** 僧衣。其縁にて紐の音を借り日もに續く。 **はやて** 風 **敷波** 類に寄す
て衣に續く。心詮しく思ふ意。

一乗の妙なる花 法華經をさす。一乗妙典とも言ふによりて一乗 **苔の衣** 新古今増抄に「苔の衣と
といひ、妙法華の字を削りて妙なる花といへり。

其語に續けて衣の玉と云ひかけ、玉の縁にて光といへり。衣の玉は法華經に出で **海士のかる** 古今集に
たる比喩を詠じ慣はしたる歌詞なれど此には文の連鎖としたる外深き意味なし。

御膳 典侍直子の歌を其儘後シテ出の謠とせり。歌意はわれ一人我身を泣き歎くのみにて決して世の中を恨む
まじとなり。われからは海草に栖む蟲の名、これを我心からの意に綴らんとして上二句を其序とせり。

の贅 太神宮へ **夕月** 夕方西空に在りて程無く落る舊曆月始の月。 **鹽木** 鹽を焼く爲、こりもせて
の獻魚。宵ながら入るといふ意にて入汐に云ひかく。

木を燃ると懲 **あごの海** 此海名萬葉集に多く見えたれど何れも志摩又は攝津の海にして伊勢に關係無し。
ることを兼ぬ。それを此に出せるは、阿濃の郡の「濃」字を「こ」と讀ませ、萬葉集の「あごの海」を

阿濃の海と解したる作者の誤なるべく、其意を受けて次 **伊勢の海** 龜山殿七百首に「伊勢の海清き渚の
の阿濃の詞に綴る事の修辭上の便ありし爲なるべし。夕浪に拾はぬ玉は盤なりけり」とあ

るを借り、玉の意を以て **持網** 手に持ちて魚 **丑みつ** 丑の刻は今の午前二時。それより四時まで
たまくと續けたり。 **火車** 手を捕る網。を三分して丑一つ、丑二つ、丑三つと稱ふ。

に業積む 火車は地獄にて罪人を乗する車。それに身を乗 **目の前の地獄** 佛教にて淨土も地獄も己
するを罪業を積載する如く云ひなしたるなり。

かく **紅蓮大紅蓮** 共に佛説八寒地獄の中。紅蓮は酷烈なる寒氣に膚肉の壞れて **焦熱大焦熱** 同上
紅蓮華の如くなる地獄。大紅蓮は其狀の更に甚しき地獄。

地獄の中焦熱は火熱に焙られて膚肉の焦げ爛 **焦熱大焦熱** 同上
る、地獄。大焦熱は其一層甚しき地獄なり。

装束附

前シテ (漁翁)

面朝倉尉笑尉の内、尉髪、襟淺黄、着附無地熨斗目、茶紐水衣、緞子腰帶、尉扇、釣竿。

後シテ (阿漕)

面瘦男加和津の類、黒頭、黒地金緞鉢卷、襟淺黄、着附無地熨斗目、水衣(白又は淺黄)、縫紋腰帶、腰袋、
墨繪扇、網。後に大口着ることもあり、其時は腰袋前に用ふ。

ワキ (旅僧)

角帽子、着附無地熨斗目、紐水衣、緞子腰帶、扇、珠數。又男ワキの時は素袍上下、小刀、扇。

遙々と分りけり浪の溪路邊通ふ平
(シツマル)
 鳥の聲聞きて旅の寝覺を須磨
(前ローシ)
 の浦開の戸もも明け暮れて可漕
(シツ)
 浦も著るわづら可漕が浦もいかに
(シツ)
 けり(シツ) 急なる程よるはなを伊勢
 の國安濃の郡もやら申る暫らく
 人を相待ち處の名討ちの草むらさか

思ひの(シツ) 波あらで乾を隙もあは
(ツヨク)
 海士衣身の杖もも限らま(シツ) それ
(サシ)
 世や度いさむらひちて入らぬらむらも
 せめても職を誓む田もかまらま
 かく淡まの殺まの家もあは明暮
(シツ)
 物の命を殺むらひの誓もかまらま
(シツ)
 りの殺むらひもかまらまの
(シツ)

もてばちのらなからせよの海士の目

目もあらも身もびらも 賤又給ひら

あよヨウク^{半カハ上(健ニサラリ)}びも名所^{ヨウク}着^{シテ}跡^{シテ}よ^{シテ}駈^{シテ}ねて

年^{シテ}経^{シテ}ば^{シテ}あ^{シテ}ま^{シテ}海^{シテ}士の^{シテ}杖^{シテ}く^{シテ}藻^{シテ}の

夕^{シテ}煙^{シテ}身^{シテ}を^{シテ}杖^{シテ}く^{シテ}あ^{シテ}ら^{シテ}わ^{シテ}ら^{シテ}も

あ^{シテ}ら^{シテ}わ^{シテ}ら^{シテ}も^{シテ}あ^{シテ}ら^{シテ}わ^{シテ}ら^{シテ}も

あ^{シテ}ら^{シテ}わ^{シテ}ら^{シテ}も^{シテ}あ^{シテ}ら^{シテ}わ^{シテ}ら^{シテ}も

● 阿漕

聞^{シテ}ま^{シテ}給^{シテ}入^{シテ}物^{シテ}の^{シテ}名^{シテ}も^{シテ}處^{シテ}よ^{シテ}ら^{シテ}て^{シテ}變

り^{シテ}け^{シテ}り^{シテ}處^{シテ}よ^{シテ}ら^{シテ}て^{シテ}變^{シテ}り^{シテ}け^{シテ}り^{シテ}難^{シテ}波^{シテ}の

蘆^{シテ}の^{シテ}浦^{シテ}風^{シテ}も^{シテ}こ^{シテ}よ^{シテ}ら^{シテ}伊^{シテ}勢^{シテ}の^{シテ}濱^{シテ}杖^{シテ}の

音^{シテ}ち^{シテ}か^{シテ}入^{シテ}て^{シテ}聞^{シテ}ま^{シテ}給^{シテ}入^{シテ}藻^{シテ}は^{シテ}燒^{シテ}く^{シテ}煙^{シテ}も

今^{シテ}の^{シテ}絶^{シテ}え^{シテ}よ^{シテ}ら^{シテ}つ^{シテ}目^{シテ}見^{シテ}こ^{シテ}ら^{シテ}の^{シテ}海^{シテ}士^{シテ}の

志^{シテ}ち^{シテ}か^{シテ}ら^{シテ}も^{シテ}年^{シテ}か^{シテ}ら^{シテ}て^{シテ}申^{シテ}を^{シテ}海^{シテ}士^{シテ}衣^{シテ}敷^{シテ}島^{シテ}

子^{シテ}寄^{シテ}り^{シテ}も^{シテ}入^{シテ}ら^{シテ}も^{シテ}あ^{シテ}ら^{シテ}も^{シテ}あ^{シテ}ら^{シテ}も

早^{シテ}泊^{シテ}可^{シテ}漕^{シテ}が^{シテ}浦^{シテ}の^{シテ}申^{シテ}を^{シテ}あ^{シテ}ら^{シテ}も^{シテ}あ^{シテ}ら^{シテ}も

語りし人 ニテ後(落着ナドワシリ) 總じて此浦を河漕が浦と

申さる。伊勢を神宮居降臨より此

かたは居膳調維の網を多く居あつた。此

神の居お言ひのや。海鳥のつら

くづ此處の多く舞ひのまじり。此

中を海鳥のまじりのおまじり。此處の

まじり。此處のまじり。神前の居あひ

細を引く

まじり。此處のまじり。神前の居あひ

可漕からよあま入業の居あひの悲

一から。夜夜忍びて網を多く暫一

人も知らず。一度重あつた。題して。

河漕を練の居あひ。此浦の仲は

はあひり。此處のまじり。伊勢をの海ま

罪深も身を苦みの海の面重ねて重

● 荷

(神(テシカカト)

地 中(前ヲ受ケテ運(モヨク)

カテ(拍子合)

罪科ツミトガを受くるも冥途ミヤドの道ミチまでも
 安カテ安カテまのカテ名ナのカテあカテ今イマも阿漕アウが
 うらめや阿責アキの責セも隙ヒマあカテくカテて
 苦クみも度タ重カサある罪ツミ吊ツルをカテ終ハへカテや
 恥ハぢカテやカテのカテへカテやカテ語コトもカテあカテまカテりカテげカテよ
 阿漕アウがカテうカテきカテらカテるカテ身ミのカテこカテきカテやカテ語コトの
 色イロもカテ錦ニシ木キのカテ數カズ積ツりカテ千チ束カのカテ契カケ志シの

▲片クセ

クセ下(海ニ出テ寂シク)

ぶ身ミの阿漕アウがたカテと入カテ憂ウレきカテ名ナ立タら
 憲ケン青アヲとカテ聞クらカテ其ソノ歌ウタへカテの忍ニガびカテ妻メ阿漕アウ
 阿漕アウとカテいカテひカテひカテもカテ責セ一人ヒトは度タ重カサあ
 りカテ悲カハレいカテれカテおカテ切カあカテまカテやカテさカテるカテ坐マ蓮レン臺ダイの
 幻マヤカシあカテらカテ現アれカテてカテ執シツ心シンのカテ浦ウラはカテのカテ哀アハレあ
 りカテけカテるカテ値チ遇グあカテまカテ一ヒト樹ツのカテ宿ヤドりカテあカテも
 他タ生マのカテ縁縁とカテ聞クへカテものカテちカテほカテりカテ身ミもカテ前マの

世の値遇（漸次ニカマラテ）ちまきごとく松蔭（イケダレ）よりうらがれ
 絵入墨衣（地上）日も夕暮のは煙（イケダレ）まきほ
 ふかたや漁火の影（明カニキク）もほのうみ見
 えそめて海邊も晴（地）むら霧よ
 まらや手繰の網の綱（地）繰りあへ
 縋りあへ（氣ヲカケテズカリ）浮きあへ（前ヲ受テテ地ニカク）むら霧よ
 俄（或ラカクテ位違シ）疾風吹き海（上）づら暗くあか昏れて（ハヤク）

雑子
 待詔
 切迄
 阿漕
 村上秋
 穂カニスラリ
 ツヨク
 柏子合

志望のまきそひ漁の登消を失せて
 こころもつらよむか聲のはは浦を
 ながりあへ（希）あはかみあへ（希）失せよ（中入）つら
 あとはかみあへ（穂カニスラリ）失せよ（中入）つら
 いさ吊ちん敷この（希）いさ吊ちん敷この
 法の中（前）よも一葉のぬあ（前）たのひもと
 きて（切）若の衣の（前）あみら（前）ら（前）家（前）よ（前）あ（前）か（前）暗か

ら。ト。家。の。光。の。暗。から。ら。ウ
出シテ中 (物連ヤニ押ヘテ)
ヨク (拍子不)
海。ま。あ
か。る。若。深。に。棲。む。中。の。お。れ。か。ら。と。音。を
キク。ト。ツク
こ。そ。は。な。め。せ。を。恨。み。た。今。宵。は。ま。こ
上 (兼テ張リ引立テ)
こ。い。浪。荒。れ。て。法。膳。の。執。行。の。網。が。ま。だ
下 (行)
し。ら。ぬ。ま。の。う。よ。ま。い。隙。あ。り。と。み。目
行 (確リト池ニナク)
も。あ。が。音。が。あ。つ。や。と。み。の。道。を。変。へ
中 (押ヘテシツカリ)
人。目。を。ま。の。び。き。の。び。ま。く。網。の。沖
心 (持シテ)

よ。も。磯。も。舟。の。見。え。ぎ。で。誰。わ。れ。の。み。ぞ
上 (シツカリ)
あ。の。海。阿。漕。が。塩。本。徴。心。り。も。せ。で
地 (前テ後テナク)
猶。執。心。の。網。置。か。ん
イロ (イロ)
地 (健ニスラリ)
清。き。渚。の。た。ま。く。も
地 (健ニスラリ)
法。の。こ。え。耳。の。角。け。も。猶。心。ま。ら
地 (カッテ池ニナク)
唯。罪。を。の。み。持。網。の。浪。が。却。つ。て。猛。火
打 (ヤ)
と。あ。ら。ど。や。あ。ら。執。や。堪。へ。が。た。や

● 獨吟 (合方カハル) 上 (氣ヲカヘドツシト運ビヨク)
仕舞 (拍子合) ヲワク
打上調頭打切

丑みらつ過ぐる夜の夢。丑みらつ過ぐる
夜の夢。見よや因果の廻り来る火
車は業積む數るしめて目の前の
地獄も真ありげは怒りの氣色や
思ひも怨め古への思ひも怨め
古への女波女の名をえり阿漕が此
浦は猶執心の心ひく綱の手馴れに

地拍子
始・煙
阿漕が浦の罪
科をヲトリ高
トセルモノモ拍子
當リニ変リナシ

らろろろ今ん却つて悪毒蛇を
紅蓮大紅蓮の水は身を傷め
骨を砕けん叫ぶ息は焦熱大焦
熱の焰煙雲霧起居隙もあま
冥途の責も度重ある阿漕が浦の
罪科を助け給へや旅人よ助け給へや
旅人よまた浪よ入つよけりまた

可曹

浪の底よりのうら

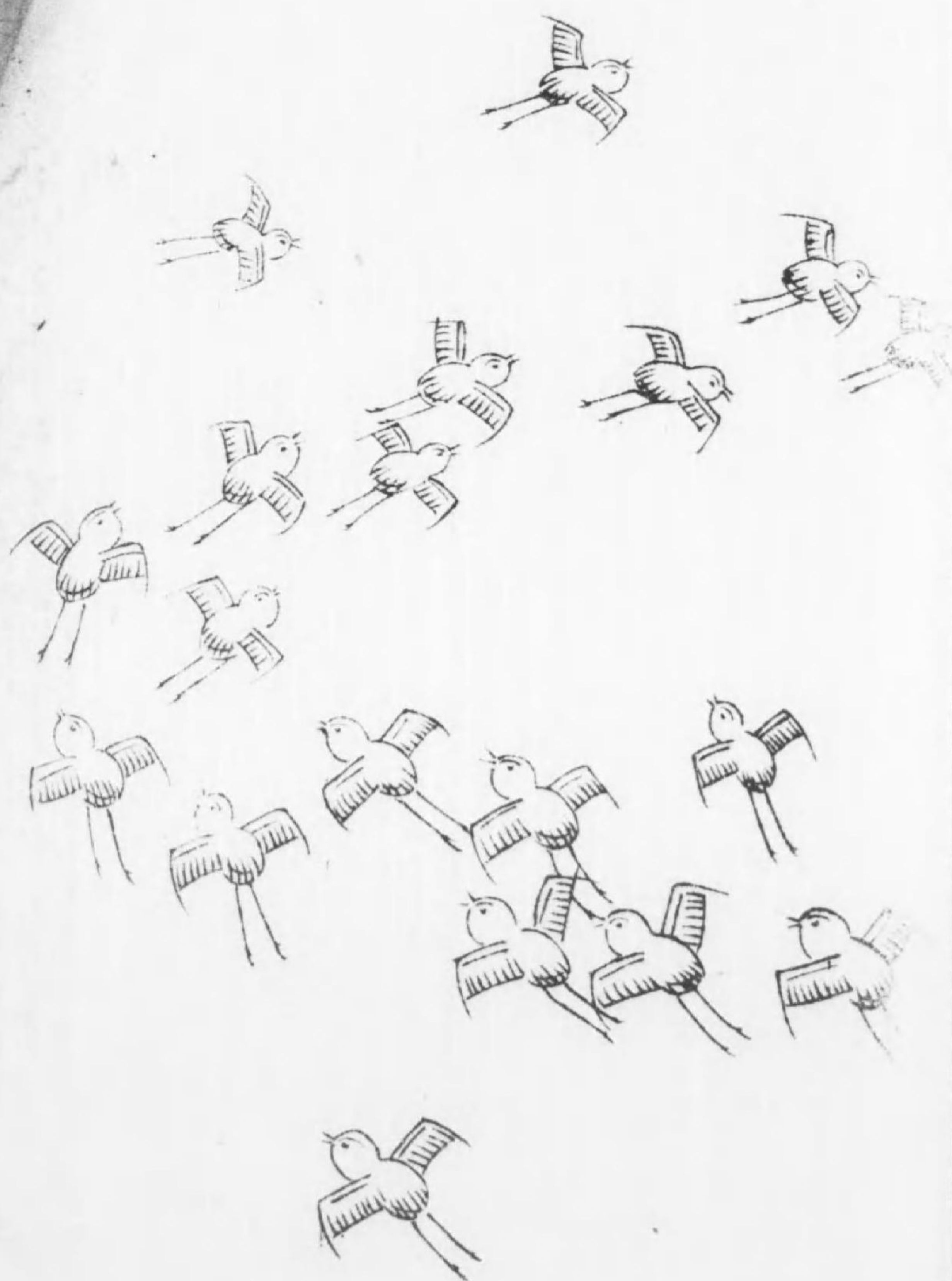
大正十三年六月五日印刷
大正十三年六月十日發行

觀世流改訂謄本
大正十三年版



訂正者 丸岡桂
發行者 土居源太郎
東京市神田區今小路三丁目九番地
印刷者 鈴木彌作
東京市神田區東松町十二番地
印刷所 信英堂印刷所
東京市神田區今小路三丁目九番地
發行所 觀世流改訂本刊行會
電話九段 二三〇五番
振替東京 一三四七五番

284
2



終